

『いえ私は行きます、遼東と言つたつてタカが地つゝきではありませんか。天上ごわけが違ひます』

と幼童は暫く何かしてゐるが、忽ち戶外へ飛び出した。

『おい／＼お前は何處へ行く』

ご母親は狂氣の如く跡を追つたが、其時早くも幼童の姿は見えなくなつた。長子の安否さへ分からぬところへ、次子が又見なくなつたので、母親は全く失望して仕舞ひ、一時自殺を圖らふごさへしたが、近處の者に慰められ兎や角うしてゐる中、日は暮れた。するご忽ち幼童が包を抱へて歸つて來た。

『お母さん、行つて來ました。兄さんは無事に暮してゐるから心配してはいけません』

ご包を開いて一封の書を出し、母親に渡した。見るご寸分紛ひなき長子の筆跡である。おやくご開いた口が塞がらない中、又一枚の着物を出し

『これは兄さんの着物ですがね。汚れたから洗濯して下さい、そくいひました』

見るとそれは紛ふ方なき自分の針跡であるから、益々稀有に思つて近處の者を喚び集め、此話をした。

『ごりやあ愈々人間ぢやない。佛だ。一万里もある道を朝立つてさうして晩に歸へられよう。此儘にしておいては佛罰が當るかもしれぬ。早く出家させなさい』

と皆言つた。そこで幼童は一万里の道をその日に歸つて來たごいふ事で、萬回ごなづけられ出家したが、果して道德高妙、神通廣大の長老となり、後ちに趙皇帝の石虎前面で二升の鐵針を嚙下し、又梁武帝の御前で頭頂から三顆の舍利を拈り出し、遂に永福禪寺を萬回老祖の香火院として勅建された云々と

西門慶は此頃俄に信神深くなつた。それは脾弱な官哥を唯一の跡継ぎご思へば、醫療ばかりでは物足りなく、神佛の加護を求めて、さうかして丈夫に育て上げたいご思つた。この子には俺のような武職は駄目だ。是非文官に仕立てよう、そうすれば未來の出世が楽しみだご先の先まで考へた。

『此子は本統に惻怛で今の處私には好く馴付くが大きくなつても此通りだと好いがね』

ご月娘はいふご

『あら奥さん、何を被仰るのですよ。此子がいまに官吏になれば、貴方は封號を贈られて鳳冠霞帔を許されます』

ご李瓶兒は思はず口を滑らせた。金蓮はこれを聞いて妬ましく口惜しく蔭で散々悪口を言つた。『ふん小便滓を護生大事に抱き擁へてさ。自分はいつのまに五花官誥太奶奶タイナイになつた夢を見てゐるよ。ふん呆れて物が言へない。今に見ろ、無常の風に誘はれた時、どんな面をしやがるか』

ご咬いた。

恰度その日永福寺改築の勸進を申込まれたので、西門慶は快く寄附帳の筆頭に五百兩書き付け奥へ來て此話をする。と月娘は非常に喜び

『貴方も漸く後生氣が出ましたね。善事は善事で好いが、悪事の方をチトお控えなさい。そうすれば子供は自然育ちます』

『悪事といふと餘り人聞きが好くないが、一體ごういふ事だに、俺れの悪事ごいふのは』

『言はずと知れたことです。人の女房を盗んだり、財産を胡麻化したり』

『おい／＼やめて呉れ。お前の説經はいつも其酸っぱい所があるので困る。抑も男女陰陽の道は前生の約束事で佛様のお手許にチャンと姻縁簿といふものがあり、皆それに依つて行はるゝので姮娥を強姦しようが、織女と媾曳しようが、西王母の娘を偷まふが、我が富貴善根は決して消滅するものではない。阿彌陀も金に光る世の中、地獄の沙汰も金次第、金さへ出せば富貴長命、子孫繁昌疑ひなし』

『おやく／＼それで折角の善根も打ち壊しだ』

と言つてゐるところへ、薛姑ご王姑は盆を提げて這入つて來た。

『おやまあお珍らしい。けふは旦那様、御在宅で御座いましたか』

ご一寸お世辭を並べ

『これは供養の菓子ですが』

ご盆を月娘に渡した。月娘は永福寺の再建に五百兩寄附したことを話すと、薛姑は西門慶の前に立つて合掌し

『佛阿、老爹、まことに御殊勝な事で御座います。好心、福をなさば壽年千歳五男二女、七子團圓と申します。だがほかにまだく、好い事も御座います。それは大した費用もかゝらないで福壽無量な事は、彼の老瞿曇が雪山に修行するよりも、伽葉尊者が髪を地に鋪くよりも、二祖師が崖に投じて虎を飼ふよりも、滿地の黄金を孤老に給ふよりも、尙ほいやまさる功德であります』

『一體それはどういふことです』

と西門慶は笑つて訊ねた。薛姑はこゝぞと膝を進め

『抑も吾れ人が信念を起せば、西方淨土に生じ得ることは火を睹るよりも瞭かでありますが、肉眼の凡夫はこれを尊信しないゆゑ、我が佛は陀羅經を授けられ、此經を專念せば竟に西方に住して永く輪廻に落ちずと説かれたのであります。でありますから此經を印行して多くの人に頒ち與へれば功德宏大であります。況して其中には護諸童子經も含んでをりますから子供の發育のため

には是非必要で御座います』

と熱心に述べ立てた。

『はゝあそういふわけですかね、してその經文は一部に付き、印刷費は幾らで紙代は幾らです』

『旦那のここですから、そんなに規帳面に當らなくとも、先づ九兩ほど經文屋に渡して置き、幾千萬卷を装幀させ、時々入用丈け引出して頒布すれば好う御座います』

と薛姑は中々猾く立廻る、西門慶も猾いことに於ては尼よりも一層うは手だから

『では五千部を極めて三十兩差上げましょう』

と月娘の手から其銀を渡した。

薛姑は幼少からの尼ではない。前身は廣濟寺前の蒸菓子屋の女房で、四五人の和尚を代るゝ引き入れ肉饅頭の内職してゐる中、いつしか經文を読みならひ、其後夫に死別れて尼となり、見掛けは立派な佛弟子だが、實は癡男怨女に引導を渡すのが本職で、近頃西門家に足繁く出入りするの、一つは婦女の多いのと、一つは金が多いのに目星を付け、いつかは一度引出さふと思ふ

魂膽である。

五八

西門慶は今度旅から歸つて来て、あちこち祝賀を受けたが、未だ其返禮をしてゐない。恰度次の日が正誕日に當るので、先輩、同僚、友人、親戚をいまこめにして一大宴會を開いた。その日倪秀才の紹介で温葵軒といふ男が來た。西門慶は此頃交際が廣くなり、上流社會と信書を取り交はすこともあり、しつかりした秘書役が是非一人必要だ、といふ事を過日夏提刑の宅で倪秀才に話したので、倪はけふ宴席に臨む旁々、温葵軒を連れて來たのである。葵軒は年四十に近く、倪秀才も同窓同期の秀才で、學問もあり、筆跡も美はしく風采も中々立派である。西門慶は一目見てスツカリ信用し翌日から向側の店裏の住宅に移らせ報酬は毎月三兩で別に四季の衣類を贈るこいふ約束で、一人では不便だらうと書童を附添はせた。

鹽取引が濟んでから、西門慶は再び喬大戸と合辦で杭州織物の商賣を初めた。會て買つて置い

た本宅前の店を開き、韓道國、崔本丈けでは手が足りないので、新に甘潤といふ手代を雇つた。韓道國は餘程前から仕入れの爲め杭州に行つてゐたが、誕辰の次の日やうやく歸つて來た。荷物は十車積みといふ大荷であつたが、税金は僅に三十兩五錢で濟んだ。それは茶と馬牙香を詰めた一二箱を開けて検査を受け、西門慶の報單を見せて容易に通過したのである。本來今度の商賣は利益を十分に割り西門慶三分、喬大戸三分、崔本、道國、甘夥計各一分を分配する約束であつたが、西門慶は道國の勞を多しし、残つた一分の利益はいづれ品物を賣上けてから道國に配當する旨を語つた。道國は西門慶の前を退き自宅に歸つてドシリと重い胴巻を卸した。王六兒は喫驚りして其わけを訊くこ、今度の仕入れで内々二三百兩の儲けを蹶出し、崔本と程よく分配したのがこれだと言つて王六兒を喜ばせた。

誕辰の當日、例の李桂姐、吳銀兒は勿論として外に齊香兒、董嬌兒、洪四兒、鄭愛月兒等四名の藝妓を喚んだが、その内鄭愛月兒丈けは來なかつた。西門慶はそこに來てゐた俳優鄭奉に彼女の行方を問ひ、王皇親家に出てゐるこ聞いて腹を立て、早速玳安と二名の排軍を差し向け鄭婆に

強談判した。若し王皇親家で許さぬならば、當方より直接交渉するこ嚇し付けた。鄭婆は狼狽して愛月兒を喚び戻した。やがて愛月兒が席に出た時、西門慶は

『畜生、不都合な奴だ。俺れが喚ぶのになぜ外へ行つた』

と詰つたが、愛月兒は別に辯解もせず、只笑つてゐるばかりであつた。

西門慶は誕辰の晩、李瓶兒の部屋に入つて寐たが、翌日早朝任醫官を喚び寄せたので、金蓮は燒けて堪らぬ

『病氣だ、病氣だと言つて男と一處に寐りやあ世話無しだ。自分で散々淫な事をしやがつて、醫者にかゝるもないもんだ』

と獨り嘔舌立てそこらを徘徊してゐると天爵觀面、忽ち門口で狗の尿を踏みつけ、新しい緋緞子の鞋を題無しにして仕舞つた。金蓮は眉を逆立て、眼を丸くし、狗を門内におびき入れ、太い棒を以ておもさまごやした。恰度李瓶兒は劉婆の藥を官哥に飲ませ、漸く寐かし付けた時此騒動が初つたので、急ぎ迎春を五房に遣はし、さうぞ靜にして呉れと懇願した。金蓮は已むなく狗を

追放したが、治まらぬは胸の内、今度は秋菊に食つてかゝり

『狗を入れたのはお前だ』

こいキナリ鞭を持つて打ち据ゐた。秋菊は例の豚のような聲を出して喚めき叫んだので、官哥はおびえ上つて目を覺ました。李瓶兒は困じ果て頻りに詫びを入させましたが、金蓮は中々承知しない。潘姥姥は見兼ねて

『<sup>ナ</sup>姐姐、少し靜かにしてお呉れよ。驢馬を打つても構はないが、紫荊樹を傷けては大變だから、のう』

こ官哥を紫荊樹に譬へて金蓮を撫めた

『お母さん、餘計なおセツカイだ。老惚れて何を言ふのたね。紫荊樹がごうしたの。驢杻棍がどうしたの。自分の娘を忘れて他人の味方をしやがる。呆れ返つた老碌婆だ』

この一言に潘姥姥は老眼から涙をハラ／＼と流し

『あゝあゝ何んて情けない事だらう。私しが他人の味方をするとはどういふわけだえ。私しは斯

うやつてお前さんの厄介になり冷たい御飯を食べてゐるのぢやないか』

と大聲上げて哭き出した。金蓮は目も呉れず、益々鞭を上げて秋菊を二三十ほご続け打ちに打つたので、天地がひっくりかへるような騒ぎごなつた、これがため官哥は絶え入るように哭き出した。李瓶兒は胸が張り裂けるような思ひがした。西門慶は其時向側の店で、恰度旅から歸つて來た韓道國、崔本等ご商賣の相談をなし家内に恁んな騒動があらうとは夢にも知る筈がなかつた。官哥はその夜、一夜むつかり翌日は時々ヒキツケ、劉婆の藥を飲ませたが、今度は更に利き目なく李瓶兒の不安は日々に増す斗りである。

月娘は官哥のたために來る八月十五日嶽廟内で頌經を思ひ立ち、急に薛王二姑を喚び寄せ、綾売陀羅經五百部、絹売陀羅一千部を注文し、直段を聞くと一部五分ご三分で合計五十五兩といふ。月娘は部屋の間を轉がして置いた魔除の銀獅子を出し、目方を見るご四十一兩五錢ある。不足十三兩五錢の出處に就いて考へてゐるご、李瓶兒が十五兩の銀香球を持ち出してこれを補ひ、尼に渡し印造を急がせた。

西門慶は此間の鄭愛月兒の仕打ちが氣に掛つて、一つ俺れの金力こそわからもう一つの偉大なる物を見せて呉れよう、と馬鹿けた考を起し、先づ三兩の銀と一套の衣服を贈り、或日衙門の歸途そつと鄭家に立寄つた。鄭婆はお詫びやらお禮やらでマゴくし、頻りにもてなし振りを見せ、愛月兒を進めた。西門慶は三更頃まで遊んで家に歸つて來た。月娘は氣を廻はし、けふは適切り王六兒に違ひない、と玳安をせめつけたが例の鱷鯨で逃げ出す。そこで新參の春鴻を召寄せ仔細を訊ぬると、彼は正直に左の如く答へた。

大門樓を真直ぐに行き、幾條かの小路を曲つて或る家の前に來た。鋸形の半截門の中に花のように着飾つた女がチラ／＼してゐた。奥に入るに初め白髪のお婆が出たが、次に口紅をさした小女が出て相手をした。それは髻、鬚形の類を用ゐてゐなかつた。春鴻は玳安、琴童と共に老媪の部屋に入り酒肉を與へられた云々語つた。

『屹度、李桂姐の處へ行つたのですよ』

と玉樓は言つた。

『いわ彼處には半截門は無い筈です』

と李嬌兒は言つた。

『だが近頃そういふ物を作つたかも知れせんね』

と金蓮は言つた。結局要領を得なかつたが、王六兒でない事を慥かめ得たので月娘は安心した

五九

一疋の白猫、それは全身白く、只額に一點の黒が龜甲形となつてゐる。『雪裏送炭』又『雪獅子』といふ名もある。まことに珍しい質で、呼べば止まり追へば走る。金蓮は『雪賊』と呼んで寵愛し、獨寐の淋しき夜はいつも之れを抱き擁へて寐たが糞仕も好く、嘗て床なご汚したことがなかつた。普通の猫は牛肝や乾魚で飼ふものだが雪賊には生肉ばかり食はせた。それかあらぬか近頃めき／＼肥え太り、全身に密生した毛の中に一個の鶏卵を藏し得るほぎになつた。そこで金蓮は一策を案出し、肉を與へるまき必ず紅い絹ギレに包んで投げ出した。猫はヂャレ戯れて後ち食ふのを常とした。これは實に恐ろしい隠謀であつたが誰れも氣が付く者はなかつた。

官哥の着物は紅緞子である。あの日から乳も吞まずにむつかるので連日劉婆の藥を服ませ、漸く恢復しかけたけふ、如意兒を迎春の護りで外側の炕の上に哄し遊ばせると、忽ち一疋の白



猫が現はれ、あれこいふ間もなく攫みかゝつたから堪らない。官哥はワーと一聲發したまゝ手足を亂打して倒れた。飯を食つてゐた如意兒は仰天して茶碗を投げ、そくざに官哥を抱き上げたが、猫は執念く狙ひ寄るので迎春は必死となつてこれを追ひ除けた後ち、急に上房に馳け付け、李瓶兒に此事を知らせた。李瓶兒は轟く胸を抑へて月娘と共に部屋に来て見ると、哀れや官哥は眼を吊り上げ、口に白沫を吹いて息も絶えぬなる有様に、氣も魂も顛倒し

『お！好い兒だ。お前はさうして恁んなになつた。あゝ困つたここが出来た』

こ哭き聲出して抱き擁へたが中々恢復しさうもない。

『一體その猫は何處から來たのだえ』

こ月娘は落着き拂つて迎春に訊いた。

『五娘の猫です』

こ二人は口を揃へて答へた。そこで金蓮を喚び寄せ

『お前さんの猫が官哥に爪をかけたそうだが、どうしたのでしよう』

こいふ。金蓮は唇を翻へして

『誰れがそんな事を言つたのです』  
と問ひ返へした。

『此處にゐる乳母こ迎春が見たのです』

『ゑー此婆は太い奴だ。何んだつて私しに言ひ掛りをするのだえ。内の猫は私しの側に休んでゐて、憚り乍ら一度も外へ出たことはありませんよ。さうして洵におとなしい猫で、人に爪を掛けるなんて、そんな事があるわけがありません』

『お前さんがた。本統に見たのかね。其時の模様を詳しくお話下さい』  
と月娘は再び二人に聞き糺した。

『ゑね、あの猫は毎日此處へ這入つて來て紅い物を見るとスグ跳び付きますよ』  
こ答へた。

『あら馬鹿な事をお言ひでないよ』

ご金蓮は遮つた。

『毎日来るものなら、なぜ毎日官哥に跳び付かないでしょう。けふに限つて开んな事があるごは不思議ぢやないか。出鱈目も好い加減にして置け』

と言ふまゝついと立上つて、ざま見ろこいはぬ許りの顔付で出て行つた。

月娘は子供の様子が危いと見て取り、先づ生姜湯を灌ぎ、一方來安を急派して劉婆を喚び寄せ其指圖に依つて燈芯薄荷金銀湯を煮させ、又劉婆は金箔丸を出して藥研で碎き、猫から受けた齒の跡に塗りつけてゐる間に、月娘は頭上から抜き取つた簪で、子供の口をコヂ開け、恰度出來上つた藥を灌ぎ込んだ。劉婆は眼をしばたゝき

『今度は大分手重う御座いますからね、藥が喉へ通れば好う御座いますが、若し通らなかつたらお灸を据えるよか仕方がありません』

と心細いこを言ふ。

『お灸は一往お父さんの御意見を伺つた上でなければいけません。私しごも取計らつて、歸つて

來てから大騒ぎをされるご困ります』

ご月娘は言ふ。李瓶兒は慌て、

『大娘、どうぞ此子の命を救つてやつて下さい。旦那のお歸りを待つてゐたら手遅れとなつて仕舞ひます。私しはどんなにお叱りを受けても厭ひません。引受けます』

こいつになくキツとなつて月娘に對ふ。月娘は冷淡に

『お前さんの子だから灸を据わたいと思へばお据えなさい。私しは餘計な世話を焼く因縁はない』

こ應へた。そこで劉婆は官哥の肩間に一個所、盆の凹に一個所、兩手首に各一個所、胸もこに一個所、合計五個所に灸を据えたが、官哥は只昏昏と眠るのみで利き目は更にわからない。そうして晩になつたが、官哥は未だ覺めない。やがて西門慶が歸つて來たので、月娘は劉婆に銀五匁與へ、そつと甬道から立去らせた。その時西門慶は上房で着物を着換へてゐたが、官哥が病氣と聞いてスグ六房に來た。見るご李瓶兒は滿眼に涙を浮べて一言も言はない。官哥の身體を見ると傷痕もあるし灸痕もある。不思議に思つて乳母に其わけを糺したが、これも又一言も言はない。

そこで上房に引返へした西門慶は、月娘の口からけふの話を聞き糺すや忽ち烈火の如く怒つて、金蓮の部屋に躍り込み、そこに寝てゐる雪獅子を引攫み、廊下に持ち出し、礎石の上に叩き伏せ只一打に頭を砕いた。そうして李瓶兒の部屋に戻つて來た。

『猫は今俺れが處罰して來たが、あの婆め、飛んだ事を仕出かす奴だ。子供に灸なき据ゑてこれで治れは好し。若し治らなかつたら、明日衙門に引出し、ウンミ懲らしめて呉れよう』  
といきまいた。

『あらまあ、貴方、なにを被仰るのですよ。子供が今、死ぬか活さるかの境ぢやありませんか。醫者に掛けても屹度治るご極まつたものでもありません』

ご李瓶兒は灸の利き目を唯一の便りとしてゐるが、如何せん西門慶の相像通り、風氣は内に反り變じて慢風ごなつたので、腸胃が動き、尿小便が流れ出し、それが五色のいろをなし全く昏睡状態に陥つた有様に李瓶兒は狼狽し、各處に神トを求め卦を立てたが、皆凶あつて吉無しである。そこで月娘は西門慶を哄して再び劉婆を喚び來り跳神(お祓ひ)を行ひ、又小兒科の太醫に請うて

一種の療法を試みた。それは接鼻散ごいふ薬を鼻孔内に吹き込み、涙が出れば好いのである。だが一向涙が出なかつた。李瓶兒は飯も食はず泣いて看守したが、此上どうしようもない。そのうち八月十五日ごなつた。月娘の誕生日も斯ういふ取込みがあるので、親戚から受けた贈物を皆返へし、只吳大妗子、揚姑娘、例の二人の尼のみ家中に止めた。尼達はその請負つた陀羅經の利益分配の事から喧嘩を初め互に押しつけ合つてゐるが、期日に迫り賁四に催促され、漸く千五百巻取りまごめて持つて來た。で李瓶兒は紙馬香燭代として別に錢一吊文を薛姑に與へ、陳敬濟の見張りで、早朝から岳廟で經を施與した。

喬大戸家では曾ての婚約があるので官哥は大事な者である。で孔嫂兒ごいふ女を一日一度遣はし、病狀を見てゐるが益々重體ごなるので、或日小兒科の名醫鮑太醫を差し向けた。處が全く手遅れで如何ごも手の下しようが無いごいふ診断、已むなく銀五匁遣はし、氣休めのため薬を請ひ受け、飲ませてみたが悉く吐き下し、眼を閉ぢ齒を咬ひしばつてゐる情けさに、李瓶兒は官哥を抱き締めて

『お父さん、この子は、もう駄目ですよ』

こ今更おい／＼、哭き出した。西門慶は毎日衙門から歸るとスグ此部屋に入て様子を見てゐたが望みは刻々に失はれるばかりである。折しも八月下旬、夜に入つて底冷ひを感じる氣候であつた李瓶兒は帶も解かずに病兒を抱へて身を横へてゐたが、人は皆寐入つて銀燭晃々さひかり、月色聞き窓外は物凄いほど靜かである。こ見ると花子虛が前門から這入つて來た。それば白衣を着て生前少しも變らぬ姿で、じつここちらを見詰めてゐたが

『已れ淫婦、何故我が財物を盗んで西門慶に與へたか』

こ罵つて阿々と打笑ひ

『天の目が來た。俺れはこれからお前の罪を訴え出る積りだ』

と急に出て行かふこする。李瓶兒は、大變こ必死となつて縄がり付き

『ごうぞ哥さん、ゆるして下さい』

と詫び入れたが花子虛は肯かす、兎や角うしてゐる中に目が覺めた。

『おや今のは夢だつたか』

と氣がついてみるこ、肌はびつしより濡れ、自分は官哥の袖を固く握り締めてゐた。時に三更三點を打つたが身内ぞ／＼と慄立ち、その氣味悪さは連も夢とは思はれない。

次の日西門慶が來たので其話をする

『死んだ奴が何。歸つて來るものか。それは心の勞れだ』

こ一笑に附し、連日の看病勞れで皆睡るから部屋が淋しい、と早速吳銀兒を喚んで夜伽をさせるこにした。夕方玳安が吳銀兒を喚んで來た時、官哥を抱へてゐた如意兒は急に

『奥さん大變ですよ。坊っちゃん引き付けました』

こ叫んだ。李瓶兒は慌て、抱き取つて見ると、開け放しこなつた黒い眼球はギョロリこして口は酷く上の方に引ッ吊つて來る。

『おやこれは大變だ。誰れでも好いから早く、お父さんを喚んで來て下さいよ』

と李瓶兒はおろ／＼聲こなり、側の者に吩咐けた。其時西門慶は常時節から例の家の話を持ち

込まれ、廳堂に出て應待してゐたが、間口二間、奥行二層、大小四間の部屋があつて直段が三五兩と相談されてゐる時、忽ち官哥が危篤を聞いて、そこへ立上り

『今取込みがあつて、ゆつくり話も出来ないから、金はいづれこちらから届けてやる』

と追ひ返へし、急ぎ李瓶兒の部屋に來た。見るに哀れや官哥は一息毎に悶え苦しみ、逆も側で見ても見られず、明間に移つて椅子に腰掛け、溜息吐き、半碗ほど茶を啜る中、官哥は遂に全く息絶した。時に八月二十三日申時で、生れてから漸く一年二個月である。家内の者は皆聲を上げて哭いた。殊に李瓶兒は、驚きの餘り打ち倒れて一時氣絶の状態だったが、間もなく覺醒すると同時に

『おーく星に救はれなかつた兒、お前は全く不幸の兒だ。なぜ私しを苦しめる。なぜ私し一處に死なない。逆も此世に永らへてあるべき身ではないのに、可愛い可愛いお前に別れて、さうして此儘生きてゐられよう』

と宛ら氣も狂亂の體で慟哭した。如意兒、迎春は傍に哭き伏し、身動きもしなければ物言ふこ

とさへし得ない。西門慶は時を移さず小廝に言ひつけ、前廳の西廂をキレイに掃除させ、そこに兩條の櫪子を並べ、子供常用の枕席被褥にくるんで其屍體をソックリ運ばせようとしたが、李瓶兒は官哥をしつかと抱へて

『おゝ救星無き兒よ。いごしい我が兒よ。我がむら肝も今はむしり取られたか、折角の辛苦も水の泡となつてお前はもう此世のものでないか』

と同じような事を繰返して泣き口説いてゐる。側に連れ哭きしてゐた月娘は、急に涙を斂めて李瓶兒を慰めたが、中々取り鎮まるものではない。

其時西門慶は側に近寄り

『おいこら、そう取亂してはいかん。もう斯うなつては我が子でない。死んで仕舞つた物だ。いくら泣いても叫めいても死んだ物が返るわけではない。生き残つた自分の身體を好く考へろ』

とわざと聲を荒らけ、叱り付けたので李瓶兒は漸く手放した。其顔には爪痕あり、寶髻は倒れ髪は蓬の如く散亂して見るも哀れな有様に西門慶は思はず涙ぐみ、急に月娘に對つて

『今何時だらうな。陰陽生を喚びにやらうと思ふが』

こいふ。月娘はスグ答へて

『申時前後だと思ひます』

といふ。孟玉樓は側から

『そうするに生れた時も申時で死んだ時も申時ですね。只月が違ふばかりで日は全く同じです。』

二十三日は恰度満一年と二個月に當ります』

こいふ。小廝は左右から近寄つて官哥を提けて行かふこする。李瓶兒は急に起き直つて

『あれ何をするのよ。开んなに急いで何處に持つてゆくよ。未だ胸がこれ此通り暖い』

こ絶叫したが、やがて力なく倒れ

『あゝ情けない。あゝ苦しい。お前は何處へ行く。お前は何處へ行く、生き別れて何處へ行く』

と啼噓きながらおのが頭を已れこ地に叩き付けた。其隙に小廝等は屍體を西廂に運び移した。

月娘は西門慶に對ひ

『此子として一番大事なもの、喬大戸と師父廟ですから、早く向ふへ報らせておやりなさい』

『ウムそうだ。師父廟の方は明日でも構はぬが、喬大戸にはスグ知らせさばなるまい』

こ玳安に吩咐け、又徐陰陽に人を出し、又賁四に十兩渡して棺材屋に走らせ、平頭衫を持參して即刻小棺材を作るべく命じた。喬大戸娘子は悲報に接して、轎を飛ばせて來たが、門を潜るこ同時に、大聲上げて哭出したので一同は又連れ哭きした。そこへ陰陽徐先生が到着して物馴れ顔で悠々と黒書を開いた。月娘は立出て見るこ

曰く、政和丙申六月二十三日申時生れ、政和丁酉八月二十三日申時卒す。月は丁酉に當り日は壬子に當る。天地の重喪を犯す。本家の哭聲を忌む。親人忌まず。入殮の時は蛇龍鼠兔の人を避ければ吉なり、こある。

又曰く、壬子の日に死する者は、上、寶瓶宮に應じ、下、齊地に臨む。彼れ前生に於て曾て兗州に在り、蔡家の男子こなる。已れの力を持つ人の財物を奪ふ。酒を飲んで落魄し天地を敬せず六親ために事を構へ煩累あり。氣寒の疾に遭ひ臥床穢汚して死す。今生小兒こなつて亦風癩の疾

を患ふ。十日前六畜に魂魄を脅かされ土日太歳を犯すに依つて先づ魂魄を攝去さるゝも、托生して鄭州の王家に至り男子となる。後ち千戸となり、壽六十八歳にして終ふ、こある。

徐先生は西門慶に對ひ

『埋葬は明日が好う御座います』

といふ。西門慶は到惑さうな顔付で

『三日目に、是非お經を上げたいので、出殯は五日目にしたいと思ふが如何で御座いますよう』

こいふ。徐先生は又何か繰つて見て

『二十七日は差支へありません。此日は誰れの本命をも犯してをりませんから、但し土を掩ふのは正午に限ります』

こいひつゝ一枚の書を認め入殮を促した。李瓶兒は小道衣、道髻、道鞋、道襪の類を取出して棺に欵め、長命針を打つた後ち、一同こ共に又大哭した。

次の日西門慶は衙門を缺勤し夏提刑は此由を聞傳へて散廳後弔問した。又西門慶は吳道官に告

け報らせたので、玉皇廟内と喬大戸家では三牲の卓を備へて祭奠を行ふた。吳大舅、沈姨夫、門外の韓姨夫、花大舅も亦三牲を備へて銀紙を焼いた。應伯爵、謝希大、温秀才、常峙節、韓道國、甘出身、賁第、傅銘、李智、黃四等はそれ〴〵香奠を出費して通夜した。

三日目には報恩寺から八名の僧が来て誦經した。僧を返へして後ち西門慶は又提刑こいふ者を喚んで祭事を執行し、畢つて大廳に席を設け衆人を馳走した。此日藝妓側では李桂姐、吳銀兒、鄭愛月兒なきが加つて紙錠を献じた。

李瓶兒は追慕の情に驅られて飯も食はず茶も飲まず哭いてゐる。遂には喉を枯らし聲が潰したので西門慶は心配し、晝間は如意兒、迎春、吳銀兒なき左右離れず守らせ、夜は自ら枕上に坐し三日の間いひ慰めたが、何を言つても耳に入らぬ様子に困り果て、遂に薛姑に依頼して說經を聽かせた。

『貴方は、そういつまでも哭いてゐてはいけませんよ』

こ薛姑は先づ物柔かに口を開いた。

『官哥は誰れの眼にも貴方の子のように見えますが、實は貴方の子ではありません。あれはカタキです。債主です。陀羅經の中にもチャンミ例を擧げてあります』

昔或る婦人が三度子を生んで三度とも二年ならずして失ひました。婦人は江邊に往て死兒を投じようとしたが、さうしても捨てる氣になれないので、悲嘆の涙に暮れてゐると、忽ち觀世音菩薩が一櫓夫の姿に化して現はれ給ひ、婦人に告げ玉はく、お前は泣くにも及ぶまい。これはお前の子ではなく、前生の仇カタキで三度此世に托生してお前を殺さうとしてゐるのだ。嘘だと思ふなら此場で見せてやらう、死兒に一指を加へるこゝ、不思議や死兒は起き上つて夜叉の形相淒しく水中に立ち

我は曾て汝に殺されたるを怨み、特に來つて冤を報せんと欲す。然るに汝、佛頂心陀羅經を常に持しをるより、善神日夜擁護して我が思を遂ぐる能はず、我れ今觀世音菩薩の超度を蒙り、これより永く汝を怨みを斷つ、と言ひ畢つて水中に沈み、姿を消した。

さあこれです、此婦人の境遇と今の貴方の境遇と全く同じです。貴方は過日陀羅經千五百卷を

施與した功德に依り、あのカタキが如何に貴方をつけねらつても貴方の身體を害するこゝは出来ません。いや、其功德に依つて彼の怨は全く消れて仕舞ひました。ですから若し今後産れた子があればそれが貴方の本統の子です』

ミ懇ろに説き諭した。李瓶兒は夢の事なき思ひ出し、なるほごそうだ、と思つたが、未だ混み上ぐる悲しさが胸の底に悶へてゐて、なにかにつけて涙が出る。

四日目は早くも過ぎ去り二十七日もなつた。此日早朝から青衣白帽の小童八名を雇ひ入れ、棺柩を荷なはせた。棺柩には大紅銷金の布を掛け、旛幢雲蓋、玉梅雪柳を以て取り圍み、又大紅の銘旌一旒を前方に建て『西門家男之柩』と題した。吳道官は又十二名の青衣小道士をつかはし、棺柩を遶つて奏樂し、西門慶は素服を着て數多の女族、親朋を引き連れて送葬した。西門慶は李瓶兒の狂亂を恐れて、故上には連れて行かず、孫雪娥、吳銀兒、二人の尼、其他乳母、女中なごを家に残して充分警戒させたが、それでも愈々出殯もなつた時、門底に昏倒して額を傷け簪を折つた。さうして皆に擁へられ、部屋に入つてみるに炕上はガランとして壽星、傅浪鼓なごのおもち



やが床頭に掲げあるを見るに、又更に新たなる悲しみを添えた。

官哥を失つた如意兒は、己れの解雇を恐れておい／＼泣き出した。李瓶兒はこれを慰め

『幸ひ大娘が妊娠してゐるから心配しなくとも好い。いづれ其方に廻して上げるから』

と言つたか、そういふ自分の行末を思へば心細き限りなく、又も悲しさが混み上げて一處になつて哭き出した。雪娥と吳銀兒は側にゐていろ／＼言ひ慰めてゐたが、いつしか涙に誘はれてこれも止め度なく哭き出した。

月娘は攻上から歸つて來て喬大戸娘子に對ひ、こちらの子供は不幸にして夭折して見れば今更御息女に煩ひを掛けてはならない。此際潔く離縁して將來のこゝを考へなければならぬ、と言つたが喬大戸娘子は受け引かず、一旦約束した以上は官哥は例令ひ此世の者でなくとも縁の糸は繋がつてゐます。私しは何事があつても改めません、と誓つた。

西門慶は前廳に徐先生を招いて家内のお祓ひを頼み、各門に黄符を貼り

『死者は三丈の高さに在つて東北方に殺倒し去る。偶ま遊神に衝突して歸り來るこゝあるも、之

を斬れば吉。親者は忌まず』

などと言つた。西門慶は一疋の大布と銀二匁與へて徐先生に謝し、門口まで送り出し漸く李瓶兒の部屋に來た。そうして夜一夜言ひ慰め、官哥の遺物を悉く撤去して奥の部屋に藏めた。

六〇

その頃金蓮は俄にハシヤギ出し、毎日女中を相手に、下らぬ事をベチャクチャ喋舌つた。

『いつもお日様が頭の上にあるが、けふは少し勝手が違ふやうだ』

と言つてみたり

『おや班鳩が跌けた』

と言つてみたり

『折れた椅子には寄りようがないよ』

と言つてみたり

『大事の磨<sup>うす</sup>を賣拂つては、これから胡麻のスリやうもあるまい』  
と言つてみたり

『丸で流行兒に逃げられた女將だ』

と言つてみたり、一言目には官哥の死を謳歌するような口振りなので、これをチラホラ耳にする李瓶兒は口惜しく情けなく、ワツミばかりに泣き伏した。其夜の夢に花子虛は再び現はれ、官哥を抱いてこれから一處に新房に移らふと誘はれたが、さうしても西門慶を思ひ切れずうちくしてゐるこゝ、已れ淫婦、と大喝してイキナリ官哥を地上に投げ捨て姿を掻き消した。

その頃來保は南京緞子二十大車を仕入れて來た。税金は百兩、外に羊、酒、金緞の禮物を謝主事に贈つて税關を無事に通過した。これで新店の品物が皆揃つたので九月四日開業披露をなし、二十餘名の親友から紅幘、紅聯の類を贈られ、家の内は俄に大火の如く裝飾された。又夏提刑は使を以て花紅ホワフオン（芽出度い時、着用する装束）を贈り喬大戸は十二名の樂隊を送り、李銘、吳惠、鄭春も席に侍り彈唱したので、店内は忽ちお祭のやうな騒ぎとなつた、そこで先づ役割を定め、甘夥計、韓道國を櫃デスク内に坐らせ、一人は銀のよしあしを見、一人は品物の直段を定め、又崔本は店内の雜費支出係兼雜事取締役とした。時分はよしと西門慶は大紅の冠帶を着用して現は

れ、來客に一々果盤を呈し、蓋を舉げて開業を祝し畢つて大廳の正席に移つた。客の顔振れは喬大戸、吳大舅、吳二舅、花大舅、沈姨夫、韓姨夫、吳道官、倪秀才、温葵軒、應伯爵、謝希大、常峙節、李智、黃四、并に近處の人達で、傅日新、賁四等店の手代も加はり、大廳は十五卓席を設け、五果、五菜、三湯、五割の饗應あり、南呂紅衲襖、混元初生太極の樂を奏し、日没に至つて漸く散じた。此日の賣上高は總計五百餘兩に達したので西門慶は一方ならず喜び、晩に別席を開いて店の者を慰勞した。

次の日李智、黃四は應伯爵と同道して三百五十兩の銀を持つて來た。今期の香燭代金千四百五六十兩の支拂は、官の都合に依り次期に廻されたので、已むなく手許の端した金三百五十兩取り纏めて持參したから、殘額千百五十兩と其利子は次期まで延期して呉れとの事である。應伯爵は旁から例の美言を添ひ西門慶の許しを得た。偕て彼等が辭し去つた跡で西門慶はそこに並べてあつた銀の中から五十兩取つて

『あの常峙節から家の事を頼まれてゐるが、御存知の通りいろく取込みがあつて延引しました

幸ひけふは日が佳し。銀が目の前にころがつてゐるので忘れぬ中に、常時節に届けたいと思ふ。此内三十五兩で家を買ひ、残りの十五兩で小商なひでもしろ、こそう言つて貴方からこれを渡してやつて下さい』

と應伯爵に渡した。伯爵はその日杜三の誕宴に喚ばれてゐるので銀は常時節に届けるが家の買の立ち合は出来ないといふ。そこで王經を添えて遣はし、常時節と共に新市街に至らせ、賣買契約を結んで家屋を買ひ取つた。

## 六一

或日韓道國は自宅に酒席を設け西門慶の來臨を請うた。それは王六兒のさしがねで、一つは子供を失つた彼の煩悶を解き、一つは南方で雇入れた胡秀に、恚ういふ財主があるといふこころを見せるためであつた。王六兒は酒間の興を添へるべく隣家に入出する申二姐といふ藝女を喚んで彈唱させた。申二姐は歌數も多く、調子も高く、節廻しも好く、凡べてが郁大姐よりもまさつてゐたので西門慶は喜び、他日宴會の席に是非來て呉れと語り、銀三匁與へて歸らせた。好き折を見て韓道國は席を脱つし店の方へ行つた。胡秀は台所で幾碗の酒を竊み、微醉機嫌で佛檀の部屋に寐轉んでゐるに、何か隣の部屋でゴト／＼するのでテツキリ韓道國夫妻の仕事、こ覗いてみるとこはいかに、西門慶は床前に立ちはだかつて、床内に在る王六兒をさげしてゐる。

『私しの身體は貴方の物だよ。けふは何處でも好いから、貴方の好きな處を勝手に焼いて下さい』

な』

こいふ。そこで西門慶は線香を取り、王六兒のみぞおちの下に二個所、龜の尾に一個所、或る蓋の上に一個所、灸を据わて喜んだ。(此灸は香をもぐさの代りに用ゆ)

韓道國は店に来てみるこ已れに跟いて來た筈の胡秀の姿が見えないので、偕ては残つてゐて秘事を知られたか、こ早々引返へし、佛間に入つて胡秀を見付け出し

『已れ、此處に隠れて何をしてゐる』

と二つ三つ蹶つて、店の方へ連れて來た。其跡に西門慶は又酒盛りを初め、二更頃漸く引上げた。

李瓶兒はもう寐台に入つて横になつてゐたが西門慶が上機嫌で歸つて來たのを見て

『貴方はけふ何處へ被入しつたの』

と聞く。憂さ晴らしのため韓道國に喚ばれ席上申二姐こいふ替女の彈唱を聞いたが、實に巧いものである。あすの重陽節には此處に喚んで聽かせる積りだ、などと語り、帶を解いて床に入ら

ふとする。

『あらいけませんよ。あれから私はズツ病氣して血が止まりません。今、藥を拵へてゐる處ですから他へ行つて寐して下さい』

『俺れはどうしてもお前の側を離れる氣にはなれない。どうぞ頼むから是非此處に泊めて呉れ』

『近頃まるで貴方は駄々つ子みたようね。さうして开んなに着き纏ふの。若し私しが死んで仕舞つたら仕方がないぢやありませんか』

こ思はず溜息吐いたが、急に笑顏を作り

『いづれ好くなる事もあるでしょうから、氣長に面倒見て下さい。けふは潘六兒の處へ行つておやんなさいよう。あの人は火のようになつて貴方のおいでを待ち詫びてゐます』

こいふ。西門慶は笑つて

『そんな事を言ふと俺れは意地になつても向ふへ行かない』

『いゝ今のは冗談です。私しが頼みですから向ふへ行つて下さい』

こいふ、西門慶は仕方なく立去つた。跡で李瓶兒は迎春から藥湯を受取り、一口吸つては溜息吐き、一口吸つては涙を流し、涙の中に一盞を飲み盡くした。

金蓮は其夜西門慶の顔を見て大に喜んだが、彼かその日韓道國から喚ばれた話をするに忽ち腹を立て、

『あの色の黒い、おしやれの、いや味たつぷりの女が、どうして貴方は好いのでしょうかね』

と彼が王六兒に李瓶兒の壽字簪をやつたことなご素破抜き

『あの忘八（韓道國）が羊を飼つたり柴を拾つたりするのは皆、家の金を引出さふとする魂膽ですよ』

こ忠告したが、西門慶が笑つてうてあはないので、益々腹を立て、急に身の一部分を摸つてみて

『鍋の中で家鴨を煮て來たから、口ごわいこを言つても、身體はこれ此通り軟かだ』

こ罵つたが、やがて酒を飲んで寐床に入るといつもの通り柔順に勤めた。

次の日西門慶は聚景堂に八仙桌を設け、堂前に菊花を栽し、月娘以下の妻妾と共に重陽節を祝し、又中二姐を喚んで酒間に彈唱させた。李瓶兒は病を力めて起き上り、宛ら風に吹かれた柳のように席に就いたが、月娘から薦められた一盞の葡萄酒を飲み干すに同時に腰から下が熱くなりやがて坐に堪へずなつて部屋に戻つた。

少し前に常時節はこの間の借金の禮心で、四十個の大蟹と二碗の爐燒熟鴨を一盒に入れ、家内の手料理だと言つて持つて來た。應伯爵も連立つて來たので、花園内の翡翠軒に招き入れ、そこに陳列してあつた二十盆の菊花を見せた。これは劉太監から寄贈されたもので、大紅袍、狀元紅、紫袍金帶、白粉西、黃粉西、滿天星、醉楊妃、玉牡丹、鵝毛菊、鴛鴦花などの名品のみであつたが、應伯爵は花よりも盆を譽め、これは官窰雙籠郭漿盆で、泥土を絹羅に包んで型を作つて焼く。蘇州郭漿磚の製法に倣つたものであると説明した。

常時節の持參した蟹は骨を丁寧に取り、椒料と姜蒜と米團を捏ねて醋醬油を加へ殻内に盛り上げ蒸したもので、洵に見事な出来映々に西門慶は感心し、一半を奥へつかはし一半をそこに止め

て、折柄來會した謝希大と共に筭を下した。常時節の開業式には我々友人が費用全部を負担し、一つ盛大に行はふぢやないか、二人の藝妓は俺れが持つよ、なき言つてゐる處へ吳大舅が來たので、西門慶は三人をそこに残して月娘の部屋に入り用向を聞くこ、吳大舅は懷中から十兩出し残五兩は次の月倉庫の修繕完了次第返却するといふ話である。西門慶は、その銀は足下に差上げた積りだから返却するには及ばぬ言つたが、吳大舅は肯かず、今年道軍政の試験がある筈だから宜敷とりをして呉れ、と別の事を頼んだ。そこで銀は月娘に渡し、吳大舅を引連れて翡翠軒に戻り、更に數碗の新菜を添けて飲みなほした。そうして夏提刑から送られた菊花酒を開いた。菊花酒は水を少し加へると辛辣の性を去つて葡萄酒にもまさるこいふ話が出た。その時後邊で彈唱の聲が聞こえたので應伯爵は聽耳立て

『郁大姐よりも上手だが、誰れだらう』

こ不審な顔をした。

『申二姐といふ二十一歳の替女だが、歌數も多く、まここ巧者なものだ』

250  
15  
1400  
28

こ答へた。

『そうだらう。私しは千里眼、順風耳で、四十里の外の蜂蜜の聲まで聞き取るのだから』

こ大に自慢し、さつそく申二姐の出席を請うた。申二姐が客の好みに應じて『四夢八空』を演じ了つた時、忽ち奥で大變な騒ぎが出來した。それは部屋に戻つた李瓶兒が間もなく小用を催し馬桶に腰を卸すこ同時に、ゴホ／＼こ重湯のようなものが流れ出し、跡始末をして裙子を穿き掛けた時、眼が眩んで倒れた。迎春は驚いて床に抱き上げ、急ぎ此由を月娘に報らせた。一同は盃を措いて來てみるこ馬桶の中は血の海である。此報を聞いた西門慶は客に陳謝し、これも慌てゝ來て見るこ、例の生姜湯で漸く覺醒したところである。李瓶兒は別に苦痛もなく、倒れた時眼の前か急に暗くなつたと語つたが、顔色は眞蒼になり額は傷ついてゐた。彼女は西門慶の顔をみるや否や袖にすがつて泣き出した。

『おーよし／＼心配するな。あした早く任醫官を喚んでやらう』

と西門慶は其夜一夜病床に附添つてまんじりともしなかつた。任醫官は翌日の午後漸く應診し

だが、彼女の脈搏を見るに憂慮に堪わざるおもちで部屋を出て西門慶に語つた。

『奥さんの脈息は前こ較べるに著しく沈重の度を加へました。これは七情、肝肺を破り、火こ木が旺んで上が虚なるゆゑ節制を守ることが出来ません。譬へば山の崩れるような有様です。若し血が紫色を以て此儘止つてゐれば好う御座いますが、鮮血が流れ出したら私しの力では及びません』

といふ。西門慶は一疋の杭絹と銀二兩を贈り、歸脾湯といふ藥を與へられたが血は益々流出するのみで更に利き目がない。そこで大街道の胡太醫を喚んで診察を請ふと

『氣は血管を押し、熱は血室に入る』

と説明したが、その藥の利き目は前同様であつた。申二姐は一夜泊つて銀五匁一枚の雲絹比甲と青貝箔りの盒を貰つて歸り、此話を王六兒に傳へたので韓道國は如才なく次の日東門外の婦人科趙太醫を紹介した。そこへ喬大戸が來て縣前の何老人を推薦した。何老人の診断に據るに

『此病氣は精が血管を押ししてゐるに氣を腦めたのである。故に血氣相打ち血が崩れた。病

氣の起りは好くわからないが』

こいつてゐる時、趙太醫が這入つて來た。趙太醫の診断に據るに

『これは傷寒病ではない。雜症である。又産後の不養生も見えないから恐らく産前から來たしたものであらう』

と言つて一通の處方箋を記した。

『甘草、甘遂、礞砂と、藜蘆、巴豆、芫花、生姜汁に生半夏を加へ、烏頭、杏仁、大麻を用ゐ、それでは味が悪いから葱と蜜を加へて丸藥にし毎朝燒酒を用ゐて飲めば可し』

何老人は側で此處方を眺め

『これは大變だ。大毒です』

こ叫んだ。趙太醫は向きになつて

『毒藥口に苦し雖も病を利すること多しこいふではありませんか』

と反駁した。西門慶は趙太醫の輕率風を嫌らひ二匁與へて立去らせた後ち何老人から藥を求め



た。何老人は二帖の藥を置き、これを飲んで經水が止まれば可し、若し止まらなければ外に仕方がない、と言つて銀一兩の禮を受けて立去つた。だが藥は少しも効しがなかつた。そこで月娘の計らひで眞武廟の黄先生に算命を請うた。黄先生の説に據るこ

『本年二十七歳の女、正月十五日午時生れ、此人辛未の年、庚寅の月、辛卯の日、甲午の時で、印授の格を理取せり。借るに四歳を以て行く。即ち四歳は己未、十四歳は戊午、三十四歳は丙辰今年流年丁酉、競争事あり、歳は日干を傷け計都陰晦星のために病を引く。主に正二三七九月病災の揖あり。小口凶殃小人の算する處、口舌の是非財物を失ふ。或は陰人事なせば大不利なり』と判断した。

花子由は開業式の時李瓶兒の病氣を知り歸つて此話をしたので、妻の花大嫂は此日二つの盒を提げて見舞に來たが、以前の面影なく別人のように疲せ衰へてゐるのを見て、悲しさ抑へ難くあり、李瓶兒も何か思ひ出し、二人は思はず聲を上げて哭いた。

## 六一

李瓶兒は初め起上つて髪を結び顔を洗ひ、自ら馬桶に下りて小用を達したが、だんく力弱くなつて足腰立たず、遂に床褥の上に草紙ツアホを敷き、女中に命じて時々替へさせ、又汚臭を避けるため室内に香を焼いた。西門慶は彼女のかるなが銀條のように細くなつたのを見て歎き悲しみ、衙門の方は隔日に出勤し、暇のある限り側離れず見守つてゐるこ、李瓶兒は西門慶をしつと眺め『貴方はなぜ衙門へ出て行かないのです。わたくし事で公け事を粗かにしてはいけません。わたしは出る物が出て、止まる物が止まれば口を開いて御飯を食べます。立派な男が斯うして一日女の部屋に這入つてゐるこは何事です』

こ叱責した。西門慶は涙を流し

『お前は蒼蠅からうが、俺れは一刻もお前の側を離れる氣になれない』

『何んですねわ男の癖に。私は今大丈夫ですが死ぬ者は死にます。死んでゆく者は止めるわけにはゆきません』

こ言つたが、忽ち氣を變へ

『あゝそうだつた。私は貴方に話すことがある。近頃さういふものか、影のようなものが附き纏つて、夜になるに夢に入り、刀杖を以て私しを脅かし、官哥を抱いて新宅に引き移らふこいふのです。私しは官哥を引取らふこするに遠く離れ、貴方に此事を話してはならないこいふのです』

こ語る。西門慶は少し氣味悪くなり

『もう彼奴が死んでから何年になるだらう。人間の死は燈火の滅する如した。お前は病氣して身體が弱くなつてゐるから、さういふ妄想を起すのだらうが、念のため吳道官に護符を貰つて、部屋の入口に貼つて置かふ』

こ玳安を玉皇廟につかはし護符を求める。又城外五岳觀の潘道士は潘捉鬼パンツォクイこいはれ天心五雷法を心得、常に符水を以て人を救ふこいふ應伯爵の話を聞いて、それも早速同人から頼ませ、部屋

に戻つて來ると

『今貴方が出た跡で彼奴が來ましたよ。今度は大層怨んで私しを何處へか連れてゆくこいふのです。さういふ偉い道士があるなら一刻も早く喚んで下さいな』

こいふ。

『應伯爵に頼んで置いたが、城外だからさうしても明日になるよ。お前、淋しければ吳銀兒を喚んで伽させよう』

『あの兒を無暗に喚ぶのは可愛さうですよ。素人こ違つて中々急がしい身體ですもの』

『それでは馮媽媽を喚ばるか』

『ゑゝさうして下さい』

次の日王姑子が、一盒の粳米こ二十塊の大乳餅こ瓜茄子の味噌漬を持つて見舞に來た。李瓶兒は迎春の扶持に依つて起上り、王姑子と快く言葉を交はした。王姑子の話に據るこ、薛姑子は經文印刷に就いて勝手に振舞ひ、期限が來ても作り上げず、五百兩の勘定書を明示しない。恐らく

一人で猫ばゝにしたものに違ひない。あゝいふ奴は未來は屹度地獄に落ちますと罵つた。李瓶兒は笑つて

『そんな事で争つてはいけません。折角の施主の志がみな無になつて仕舞ひます』

『いね、私しは決して争ひません。只あれを紹介した罪を慚ぢ、庵に在つて一ヶ月誦經し、明日漸く満願になり、恰度その時貴方の御病氣を聞いて驚き、早速お見舞に伺つたわけで御座います』  
こいひ終つて王姑は自分の持參した食物を頻りに薦めた。李瓶兒はあまり食ひたくもなかつたが、硬米粥を作らせて一口二口啜り、又乳餅を食ひ掛けてみたがこれも胸に悶れてスグ下に卸した。王姑子は陪食して此様子を眺め

『飲食は命の本こいひます。奥さま、恁んなに好く煮たお粥が、さうして召しあがれないので御座いましょう』

と自分もそゝくに濟まして側に近寄り、蒲團の中に手を差し入れてみるご、李瓶兒の肌は丸で骨を並べたやうになつてゐる。

『おやまあ、奥さまはあんなに肥れて被在しつたのに、これはまあ、さうした事で御座いましょう』

ご思はず頓狂な聲を上げる。側にゐた如意兒は代つて説明し

『奥さまの御病氣は元を糺せば氣から出た病ひです。坊ッちやまが亡くなられてから、それはくおいこしいほごお嘆きになり、數ある太醫の藥を取り換へ引き換へ用ゐられたが何の利き目も御座いません。それは折角治りかけた病氣を側でぶち壊はす人があるからで御座います。坊ッちやまが何のために亡くなられたか御存知ないでしょう。あれは五娘の猫が跳びついて引ツかいたのが元で御座います。五娘は計畧圖に當つて坊ッちやまが亡くなつてから毎日さまあ見ろといふやうな事を言つて當りつけるので御座います。私しごもは側で聞いてゐても胸を搔き搔られるやうに口惜しう御座いましたが、奥さまはこれに就いて一言も旦那様に告げ口した事は御座いません。大體大氣なお方で、御自分の物は控む目になされ、御姉妹方にはふだん充分の附届けをなさいました。五娘のお母さんにも鞋の面だの、着物だの、私しの見たところで大した金高の物をお上げ

になりました。それをあの方は本統に恩知らずの犬畜生で御座います』

と如意兒は齒ギシリして口惜しがつたが李瓶兒はこれを制し

『お前は餘計な事をお言ひでないよ。天は言はなくとも高い、地は言はなくとも厚い。私しはごうせ死んでゆく人です』

と李瓶兒は言ひ切つた。王姑は調子を合はせ

『あゝ奥様、まことに好いお心掛けで御座います。未來は屹度好い處においでになります』

と述べ立て氣色を窺つてゐるに、李瓶兒は心弱く

『私しはもう長い事はないように思はれますが若しそうなつた曉には私しのため血盆經を誦して下さい』

といふ。王姑は打消し

『貴方のような心掛けの好いお方は、屹度龍天に慈まれます。そんな御心配はなさらぬ方が可い』  
と言つてゐる内に、花子由(花大舅)が西門慶と連れ立つて來たので、王姑は此處を避けた。花

子由

『私しは些つとも知らなかつたが、此間開業式の時初めてお前の病氣を聞いて、きのふ家内を寄越したが、お前は泣いてゐたそうだね』

といふ。李瓶兒は只

『はい』

と答へて、顔を床の内側に向け只泣きに泣いた

花子由は間もなく部屋を出て西門慶に對ひ、老公公が廣南鎮守の時に携帯した藥を多分あの人  
は持つてゐる筈だが飲んだかさうだかと聞く。西門慶はいふ。それは無論飲んだが、きのふ胡大  
尹から教へられた炭と白雞冠花を煎じて飲む方法を試みたが、第一日は血が止まり、第二日は前  
より一層多くの流出を見た。花子由は思はず歎息して、それでは愈々棺桶の仕度をせすばなりま  
すまい、あした家内を寄越しますから、さうぞ宜敷と言つて立去つた

馮媽媽はその時漸く馳け付けた。きのふ玳安が使に來た時は門を鎖して外へ出たあこで、けふ

一丈青から話を聞き、初めて急を知り取敢へず来て見たのである。如意兒はその時迎春と共に草紙を取換へてゐるが、馮媽の顔を見るに冷評かし口調で

『上つ方の病氣見舞は中々暇取れますね。きのふ玳安を出したのに、なぜスグおいでが無かつたのでしよう』

『いやもう貧乏暇なしで、毎日お寺の御奉公で日が暮れても歸ることが出来ません。張和尚、李和尚、王和尚いろいろな輩さ坊主がりますからね』

こ答へた。如意兒は眞面目にその話を引取り

『そんなに澤山和尚がゐるのですか、今此處へも王師父が来たばかりの處です』

といふ。李瓶兒は馮媽が男女周旋の内職をしてゐるのを知つてゐるので思はず微笑み

『お前も相變らず出鱈目を言つてゐるね』

こいふ。如意兒は不審な顔して

『おや奥さんは久しくお粥も上らずに齋ぎ込んで被在しつたが、お前さんの顔を見るに急にお笑

ひになつたよ』

『そうでしょう、私しは退災博士です』

こ馮媽は立上つて、李瓶兒の身體を撫で

『あれから少しは好う御座いますか、御自分で馬桶に被入つしやるの』

と訊く。迎春は旁から答へて

『ゑゝ少しは好う御座いますが、以前のようなわけにはゆきません。かうやつて毎日私しぎもが草紙を取換へてゐる始末です』

こいふ。折柄戻つて来た西門慶は馮媽を見て

『お前はいつも外へばかり出てゐるが何故此處に來ないのだ』

『且那樣の前ですが、此二三日は菜漬の時期で御座いませう。少しは外へ出て金儲けをしなご冬になつておココも食べられません』

『出鱈目を言つてはいけないよ。菜葉はきのふ内の莊園から二三畦、送つてある筈だ』

『おや且那、それで御座いましたか。私しは外へ出てゐたものですから、つい知らずにをりました』

こ襪縷の出ぬ中匆々退いた。西門慶は炕の端に腰を卸し、迎春を喚んで香を焚かせ

『どうだね、けふは気分は少し好いか。粥を食べたか』

『ゑゝ今しがた王姑が乳餅を持つて來たので、それをホンの少し咬んでお粥を二口ほご召しあげりました』

『ウムそうか、もつこ勉強して食べないこいけなね』

こ李瓶兒を顧み

『けふ應二哥が潘道士を迎へに行つたところ、留守だつたそうだ。あしたもう一度こちらから來保を出して是非連れて來るよ』

『ゑゝそうして下さい。私しは彼奴に付き纏はれて苦しくてかなひません』  
と李瓶兒は力なく應へた。

『心配するな。潘道士が來ればそんなものは一こ拂ひだ』

『それはそうこ哥さん、私も縁あつて貴方ご夫婦になり、幾年の間、かうして仲好く暮しましたが、不幸にして子供に別れ、二十七歳の今斯ういふ大病に罹つていつあの世にゆくか解りません若し幸にして地獄の門が閉まつてゐたならば、再びお目に懸れるかも知れません』

こ西門慶の袖に縄がり付いて泣き出した。

『チイ姉姐、なさけないこを言ふな。そんな馬鹿な事があるわけはない。精出して藥を飲めばちき治つて仕舞ふ』

こ西門慶は慰めたが、急に悲しくなつて掩ひ重つて泣き出した。そこへ琴童が來て

『あしたは十五日で衙門に大公事が御座いますが、御出席になりますか、こ當番から使が參りました』

『俺れは迎も出られないよ。斯ういふ病人を控えて何處へ行かれるものか。牌帖を返して夏提刑に手紙をやつて呉れ』

琴童は旨を含んで立去つた。李瓶兒は

『貴方、衙門にお出なさいよ。公けの大事を悞つてはいけません。私しはこれで未だ中々死にさうもないから』

と強ひて笑顔を見せたが、西門慶は肯かす

『俺れは二三日、誰れが何ん言つても此處にゐる。そうしなければ氣が休まらない。今花大舅が来て棺材の仕度をして置いたらどうかさいふが、お前の考はさうだらう。これは誰れでも生前から用意して置く物だが、不要になれば益々結構な話だ』

さいふ。李瓶兒は點頭いて

『ゑゝそうして下さい。餘りお金を出さないでも十兩餘りで一寸した木がある筈です。私しは亡くなつた奥さんの側に埋けて戴きたう御座います。屍體は決して焼いて下さるな。夫婦の情は格別なもので、少しの漿も残して置けば後ちくちく思ひ當るごころがあります。貴方がたは跡に残つて多くの人と仲好く暮して下さい』

といはれて西門慶は腸も千切れる思ひで

『俺は死ぬ、俺は死ぬ、俺はお前にさうして背くことが出来よう』  
と號泣した。折しも

月娘は幾つかの林檎を持つて來た。

『大妗子がこれを貴方に上げて呉れといふのです、少し食べてみてはさうでしよう』  
さ迎春に命じて皮を剥かせた。

『さうも濟みませんね、御心配掛けまして』

さ李瓶兒は點頭した。林檎はキレイに切られて甌の上に盛られた。李瓶兒は一口咬むミスグ吐き出した。

『どうも困りましたね。これが食べられなくては』

さ月娘は苦笑したが

『まあ落着いて少し寐る方が可い』

と被褥を掛けなほし、李瓶兒は内向きになつて睡つた。月娘はそつと西門慶を外へ喚び出し、『今のうちに棺材の仕度をして置かないといけませんね。あの様子では迎ても』と言ひ淀んだ。

『今も花大舅が来てその話だから、あす潘道士を迎へにやる時、序に見て來させようと思ふ』  
『それでは間に合ひますまい。若しもの事があつた時、足許から鳥が立つような騒ぎをしては見苦しく御座います』

『それもそうだな。では賁四に吩咐けよう。俺れは今李瓶兒から、私しが逝つた其跡は皆で仲好く暮して呉れの何んのか言はれて、氣が全く顛倒して仕舞つた』  
と西門慶は又も涙含んだ。

間もなく賁四は大街の陳千戸で新材を見付けたが、直段が折合はず歸つて來る途中、喬大戸に逢ひ、尙舉人の父が四川成都の推官を勤めてゐた時、老夫人のために買入れた桃花洞といふ板がたしか一組残つてゐる筈だといふ話を聞き、すぐ其足で尙家に同道し、直段を聞くと三百七十兩

といふ元直だそうだが、喬大戸のあつかひで三百二十兩に見切らせ、首尾よく譲り受けた。板は幅二尺五寸、長さ七尺五寸、厚さ五寸の物五枚あり、いづれも紅毛氈にくるんであり、即時に匠人を喚んで鋸かせてみたが、洵に名木の名に背かすかんばしい匂がぶんぐくした。西門慶は匠人に五兩つかはし一夜の中に組み立てさせた。そうして一更頃李瓶兒の部屋に來た。

『此處は穢いから貴方、さうぞ他へ行つて寐て下さい』

こいふ。見るこ王姑と馮孌孌が侍座してゐるので安心し、金蓮の部屋に行つた。

迎春は李瓶兒の吩咐けに依り戸を固く鎖した後も、燭をともし一つの大箱を卸し、中から幾枚かの着物と銀の装身具を出した。李瓶兒は先づ五兩の銀と一疋の絹紬を王姑に渡し

『私しが死んだあとで血盆經を是非頼みます』

こいふ。王姑は

『そんな御心配は要りません。奥さんのような心掛けの好いお方は、天は屹度憐みます』  
こ應へたが、李瓶兒はさういふお世辭を耳にも掛けず



『これは私しの志しですから、反物の方は構ひませんが、銀の事は決して大娘に言つてはいけませんよ』

ご注意した。次に馮媽媽を喚んで四兩の銀ご、一襲の白綾襖、黄綾裙ご、一本の銀耳搔を與へ『お前は子供のうちから好く面倒見て呉れたが、今は命數で如何ごも仕方がない。お前もモウ可成の年だから此銀で棺材の仕度でもして、あの家に安心して暮すが可い。私しは旦那に好く話して置く』

次に如意兒を喚び、一襲の紫袖襖ご藍袖裙ご、一枚の着古した綾披襖ご、二本の金頭簪ご、銀滿冠を與へ

『子供が生きてゐたらお前を末長く使ふ積りであつたが、今は子供にも別れ、自分もその跡を追ふやうなわけで何とも仕様がな。此二三枚の着物は私しの遺物として残して置くから決して怨んで呉れるなよ。お前の行末は大娘に話してあるから安心してゐるが可い』

次に迎春ご繡春を喚んで各一對の金簪ご一本の金花を與へ

『お前達は稚い時から私しに跟いてゐて着物も充分ある筈だから、これを遺物に残して置く。迎春の方は旦那のお手が着いてゐるから、大娘の部屋で面倒を見て貰ふが可い。繡春は未だ未通女だからよそへ嫁に行くが可い。それも大娘に話して置く。お前達は今まで随分氣儘に暮したが、外へ行つては決してそういふ事は出来ませんぞ。主人といふものは氣六ツかしい者と極つてゐるから、その積りで働かなければいけない』

ご訓誨した。繡春は幼な心に感激し

『私しは外へ行きません。一生此處に居ります。そうして奥さんの靈を祭ります』

ごおい／＼哭き出した。一同はこれに誘はれて聲を揃へて哭いた。

夜が白みかけると西門慶は早くも李瓶兒の部屋に來た。

『棺材がありましたか』

ご李瓶兒は先づ聞いた。

『きのふ素晴らしいのを見付けて早速仕事にかゝらせてゐるが、今に身體が好くなつたら、向ふ

へ行つて御覽なさい。それは大したものだけ』

『いくら費りました』

『思の外安かつた。三百二十兩で濟んだ』

『ゑ、そんなにお金を掛けたのですか』

と李瓶兒は嬉しく思つた。やがて西門慶は棺材の工程を見るべく出た。少し経つて月娘と李嬌兒が来た。李瓶兒は女中や乳母のあま始末を月娘に頼み互に涙に暮れた。續いて玉樓と金蓮と来たが、これも通り一遍の優しい言葉で空涙を流した。あこで李瓶兒は人無き折に月娘に對つて

『貴方もいづれお子様を持つ時があるでしょうから、其時はよく／＼注意しないといけませんよ。私は全く計畧に乗せられたのです』

こ今更口惜し涙に掻き暮れた。月娘は勿論それを知つてゐたが、自分の嫉妬心から夫にも告げなかつたことを悔む思はず賞ひ泣きした。其時潘道士が到着したので、慌てゝ部屋を取り片付けそこらキレイに掃除し、淨水淨茶を供へ、百合眞香を焚いて、病人のみ残し置き、皆次の部屋に

隠れた。潘道士は西門慶に導かれ角門に入つたが、李瓶兒の部屋の前まで来るこ、何か物に感じたらしく、ゑいゝこ掛聲して内に入り、病床の前に坐し腫を据わてゐたが、忽ち咒文をこなへ銅劍を抜き、空を斬つて明間に出た。

潘道士は八字の眉、杏子の眼、方形の口の下に鬚長く延び、威儀堂々たる有様で、頭に雲霞五岳冠を戴き、身に皂布短褐袍を穿ち、腰に雑色彩絲條を繋ぎ背に古銅劍を負ひ、足に雙耳麻鞋を穿き、手に五明降鬼扇を持して香案に對ひ、香を捻り符を焚き法水を吹いて神將を召集した。

『西門氏門中李氏、陰人の不安あつて我が案下に投告す。汝即ち當坊土地、本家六神にそれを拘して邪崇を考査し、爰に擒來すべし』

こ申渡し、潘道士は暫く瞑目定神してゐたが、やがて何事か聽き取つたものゝ如く案を離れて捲棚内に坐した。

『此婦人は惜し哉、宿世の冤鬼のために陰曹に訴わられてゐる。これは邪崇でないから擒にするわけにはゆかない』

と言つた。西門慶は

『何さかしてこれを禳つて呉れ』

と頻りに頼んだので、道士は婦人の年齢を問ひ羊の年の二十七歳といふ答を獲て

『然らば本命星を祭り、本命燈を見ん』

と言ひ、その夜三更、白灰を以て界を劃し、燈壇を立て、黄絹を以てそれを圍み、生辰の壇斗を鎮め、五穀棗湯を供へ、本命燈二十七盞を設け、上に華蓋の儀を浮べ、官人青衣を着して齋戒俯伏し、道士これを祭る。雞犬をして入らしむべからずと教へた。そこで西門慶は道士に齋を薦め、自分は沐浴齋戒して夜の三更に至つて燈壇を建立した。

先づ青龍、白虎、朱雀、玄武の四方を定め、上に三台の華蓋を設け、その周圍に十二宮辰を列べ、下部に本命燈二十七盞を點じた。西門慶は人の出入を禁じて旁に俯伏してみるに、道士は法座に座して焼香し、髪を披き劍を仗し、口中喃喃と咒文をこなへ、燈燭熒煌たる中に、一雷聲を下すに不思議や、狂風忽ち起て星斗皆隠れ、二十七盞の本命燈は一つも残らず吹き消された

そうして眞の暗の中に一白衣の男が二青衣を従へて朦朧と現はれ、手に一書を捧けて道士に渡した。道士はこれを見るに冥府から來た進達書である。そこで法坐を下り

『官人起きられよ。娘子は已に罪を天に獲、本命燈滅し、命は只旦夕の間に迫つてゐる』

といふ。西門慶は滿眼に涙を泛かべ

『さうぞ貴方の法力を以て救つて下さるわけにはゆきますまいか』

一命數已に定まる。救ふべき道がない』

と道士は超然として立つてゆく。

『今眞夜中で御座いますから、夜が明けるまでお待ちなさい』

と引き止めたが、出家の身、草行露宿す。山栖廟上は自然の道である、と應へたので、此上止めようもなく、銀三兩と布一疋を禮心として送つたが、世財を受けず、と退けられ已むなく布丈け小童に與へて送り出した。別れる時

『今夜は決して病室に入つてはなりませんぞ。悪くするに足下の身が危ぶない。呉れども注意

して置く』

こ言つて立ち去つた、應伯爵は尙ほそこに待つてゐるが、本命燈の槩様を聞き西門慶を慰め四更頃立去つた。そこで西門慶は書房に入り睡らふこしたが、病人が氣になつて堪らず、ゑゝまゝよ、死なば諸共だこ呟いて、遂に道士のいましめを破り、李瓶兒の部屋に入った。李瓶兒は内向になつて睡つてゐるが、忽ち身を翻へし

『本命燈の結果はごうになりました。なぜ貴方はスグ此處へ來なかつたのです』

こ鋭く詰つた。

『ウム別に心配することはないよ』

こ紛らさうこしたが、李瓶兒は眼を光らせ

『貴方、嘘を吐いてはいけませんよ。今二人の者が此處に這入つて來て、法師を僦つて何をするか、と睨み付けました。私しは黙つてゐると、俺れは陰司に訴え出たからお前の罪は逆もゆるされないこ言ひました。屹度あしたあたり連れて行かれるのでしよう』

これを聞いた西門慶は聲を上げて大哭した。

『お前はなぜ开んな悲しいこをいふのか。俺れは心からお前を放すこは出來ない。此數日の間俺れが此處に附添つてゐるのを、お前は知つてゐるぢやないか。お前が俺れを捨て、ゆけば俺れはごうしよう。あゝ俺れはごうしよう』

こいふ。李瓶兒は西門慶に抱き付き、暫くの間、聲も上げ得ず、泣きじやくつたが

『私しの哥さん、貴方と私しは白頭を誓つたが、かうなつてみれば是非もないわけ、先き立つ罪はゆるして下さい。私しは二言三言いひ残して置きます。貴方が守つて下されば私しは満足して目を冥ります。貴方は家事を大事に思はなければいけません。貴方には相談相手がないから。なる丈けムカ腹立てないで好く考へて事をおやりなさい。大娘も今は身重の體ですから餘り心配掛けないで、今度出來た子供は好く、大事になさいませよ。貴方は公けの身體で交際も多いでしょうが、なる丈け外では多く飲まないで早く歸るようになさいませ、私しの願はこれ丈けです。お解りになりましたか』

『おゝ好く解つた。俺れは決してお前の言葉に背かない。安心して呉れ。あゝ何んて情けないことだらう、思へば夫婦になつてから僅かな年月だ。俺れは今お前に別れては逆も生きて居られるような氣がなしない。殺せ、殺せ、天我を殺せ』

と叫んだ。暫くして李瓶兒は二人の女中と乳母の身の振り方に就いて話をした。西門慶は

『お前の召使は何處にもやらない。お前の位牌を守らせて置く』

と言つたが李瓶兒は拒み

『あたしの位牌は五七日が來たら焼いて下さい』

といつた。西門慶は一夜此處で明かす積りであつたが李瓶兒が頻りに氣兼ねするので已むなく上房に立去り、月娘と跡始末の相談なごしてゐた。

一方李瓶兒は如意兒と迎春に頼んで身體を内に向けて貰ひ

『今は何ん時だらう』

と訊いた。

『四更頃ですよ』

と迎春は答へた。やがて草紙や下敷を取換へさせすやくと睡つた。馮媽と王姑はこうから眠つてゐたが、如意兒と迎春は尙ほそこの片附物なごして枕の上に坐した。二人は起きてゐる積りであつたが、長い間の看病勞れで眠るともなくグツスリ倒れた夢うつゝの間に、李瓶兒はめづらしく床から下りて來て迎春を揺り起した。ハツとして迎春は起き上るに殘燈未だ消ぬやらす李瓶兒は元の位置に寐てゐる。不思議に思つて口邊に手を當てゝ見るに早や息絶てゐる。そこで燭をかゝけ、皆を起して尙ほ好く見るに腰の下に一溜りの血が流出し、身體は全く動かない。

此報を聞いて西門慶は慌てゝ馳け付けた時には、未だ何處やら暖く、生前と少しも變らぬ温容で、身には紅綾の胸當てを一枚着けてゐるのみである。西門慶は血に汚れた身體も厭はず抱き擁へて、口を啜り頬擦りして歎き悲しんだ。

『あゝ不幸な女よ。お前ほご義理人情を知つてゐる女は外にない。お前ほご優しい心掛けの者は外にない。なぜ俺れを捨てゝ行つた。なぜ俺れを捨てゝ行つた、いづれ此西門慶も死んでゆく身

體だが、あゝ今三尺の地上を跳び上るゝこが出来ないか』

こ叫んだ。あゝに跟いて來た月娘も頻りに泣いてゐたが、やがて李嬌兒、孟玉樓、潘金蓮、孫雪娥及び大小の女中なご加はり、いづれも聲を限りに哭き出したので、部屋は却つて景氣好くなつた。月娘は皆に向つて

『いつ頃息を引き取つたのでしようね、着物を一枚も着てゐないこは不思議だ』

孟玉樓は屍體を觸つて見て

『未だ身體に温みがありますから餘り時間を經過したものと見ゆません。今の内、着物を着せた方が好う御座います』

西門慶は恁んな話を耳にも入れず、屍體の上に覆ひかぶさり

『あゝ天の神様、この西門慶を殺して下さい。姐姐チチお前は三年間此處にゐたが一日として氣の休まる暇はなかつたらう。それは皆私しの罪だ。私しが悪い。私しが悪い。さうぞ勘忍して呉れ』  
こ泣き續けた。月娘は少し癢に障つて

『貴方、大概にして置きなさいよ。死んだ者に擦り寄つて、頼ずりしたり口を吸つたりしては死人の惡氣を受けます。自分の身體をチト大切にして下さい。なるほど好い日は送らなかつたでしょうが、それはあの人の壽命で、誰れも引き留めるこは出来ません』  
こ一本きめつけ置き、李嬌兒こ孟玉樓立會ひで死者の着物を出し、金蓮が髪を結ふ役割を極めた。西門慶は漸く我れに返へり

『着物は、あれの氣に入つたものを選んで二襲着せるが可い』

そこで月娘は新調の大紅緞遍地鋪襖べにいろあつをりにしきのうはぎ、柳黃遍地鋪裙りうわうしよくにしきのほかま、今年喬親家に着て行つた丁香色雲袖粧花衫ちらしはなのこへ、翠藍寬拖子裙すいらんしよくたほひだはかま、并に新調の白綾襖りんぎのあは、黃袖裙かうちうはかまを出せと二人に命じた。二人は迎春から鑰を受取つて別室に赴き箱を開け、可成り暇ひまぎつて三襲の衣裳を搜し出し、外したぎひらまきこでに襦身紫綾小襖はくちうのはかま、大紅小衣兒べにいろのはだき、白綾女鞆兒しらあやのくつした、粧花膝褲ちらしはなまき、腿はんを一まごめに抱へて來た。

『着物はこれで揃ひましたが、鞋はどうしましうかね』

こ李嬌兒は月娘の氣色を窺つた。金蓮は燈下に死人の髪を梳き、四本の金簪を以て大鴉青色の

手帕を頭髻に縮ねてゐたが

『あの金織狸々緋の高底鞋が好う御座いますよ』

と横あひから口を出した。

『馬鹿をお言ひでないよ』

と月娘は叱つた。

『开んなものを穿かせたら焦熱地獄に落ちて仕舞ふ。此間嫂さんの處へ行つた時穿いてゐた紫羅の鞋を出してやつてお呉れ』

と李嬌兒に吩咐けた。衆女は死人を手取り足取り飾りつけた。

その時西門慶は小廝を大廳に集め、あたりの書畫を巻き納め、幃屏を撤去し、戸板に李瓶兒の遺骸を載せて正寢下（大廳）に安置した。これは家の主人公の外、行はれぬ極度の儀式で、一妾の死を斯くの如く扱ふは世間の物笑ひであるが西門慶は何の顧慮もなく戸板の上に錦褥を敷き、遺骸の上に紙衾を覆ひ、几筵を設け香案を置き、一盞の隨身燈に火を點じ、二人の小廝を傍に侍

らせ、一人は磬を打ち一人は銀紙を焼いた。そうして何は免もあれ陰陽徐先生に使を走らせた。

月娘は遺骸を出したあとで李瓶兒の部屋を固く鎖し、別室に焼香場を設け、二人の了頭と馮嬌嬌を止め置いたが、主を失つた三人は鼻つき合はせて泣くのみである。又王姑子は李瓶兒のために密多心經、藥王經、解冤經、楞嚴經、并に大悲中道神咒等自分の識つてゐる限りのあらゆる經を誦じ、冥途の旅の安全を圖るため引路王菩薩の手引きを請うた。

一方西門慶は大廳に在つて遺骸の安置を見るに又新なる悲しみを發し、尸を撫し胸を打ち慟哭してゐたが、間もなく徐先生が來たので立上つた。徐先生は徐ろに口を開いて

『まことに御愁傷なことで御座いました。奥さまはいつお隠れになりました』

『さあ其時刻が好くわからないので、何しろ連日の勞れで四更頃部屋に入つてグッスリ寐込むと女中が知らせたので初めて知つたわけす』

『はあ宜しう御座います。一寸検めてみましょう』

と氣軽く立上り紙衾をまくり上げ、燈下に顔色を眺め手を握つてみて

『これは五更二點の轍で御座います』

こすぐさま筆硯を取寄せ、スラ／＼と一書を作つた。

『一故錦衣西門夫人、李氏の喪、元祐辛未正月十五日午時生れ、政和丁酉九月十七日丑時卒す。今日丙子に當り、月は戊戌に當る。天地の往亡を犯す。煞氣の高さ一丈、本家の哭聲を忌む。成服後妨げ無し。入殯の時龍、虎、雞、蛇の人を忌む。親人避けず』

吳月娘は玳安に吩咐け、黒書の閱覽を請ひ、死者の行方を尋ねた。徐先生は秘書を翻へして

『丙子の日、己丑の時、即ち只今死する者は上、寶瓶宮に應じ、下、齊地に臨む。前生曾て濱州に在り、王家の男子たりしが、懐胎の母羊を打殺せるにより、今世女人となり羊に屬す。招貴の夫人たり得るも雖も常に病疾あり。同輩と和せず、生子は夭折す。これに依つて氣疾を生じて死す。前九日魂去り托生して、河南汴梁開封府袁家の女となる。艱難日を度する能はず、後ち就擱して二十歳に至り一富家に嫁し老少不對、終年福を享く。壽は四十二歳にして氣を得て終る』斯く聞いて衆女は皆舌を卷いて嘆息した。西門慶は五七日過ぎて後ち破土、安葬したい希望で

あつたが、徐先生が日を繰つて見るに、五七日には安葬の期がない。そこで四七日に改め、十月八日丁酉午時に土を起し、十二日辛丑未時に安葬すれば、家内六名の本命を皆犯さないと述べ終つて殃榜(門に貼る發葬紙)を認ため、明後十九日午時に大殮を行ふべし、と言つて立去つた。

其時漸く夜が明けたので、先つ花大舅に急報し、その他の親戚にもそれ／＼喪を發し、衙門には缺勤届をなした。又玳安を獅子街につかはし、二十桶の濃紗(寒冷紗ならんか)を取寄せ、三十桶の生眼布(生綿布)を漂白させ、趙裁縫店に命じて數多の職工を召し寄せ、西廂の一間を開けて入用の物を急造させた。先づ圍幕と几帳と卓子掛と、入用の衣衾と帶と、各房の女の衫裙と、又小廝下人には白天竺の粗縫の着物を各一枚づつ割り配つた。そうして又銀百兩を以て門外の店から三十桶の魁光麻布と二百疋の黃絲孝絹を買ひ求め、衣料及び裝飾用とし、請負師を召し寄せ、天井内に十五間の大柵を張らせた。又九疋の水光絹で各房の手帕を作り、剩つたものは月娘の裙子にせよ、と命じたので月娘は少し腹を立てたが黙つて受取つた。又死者の姿を止め置きたい希望で肖像畫家を尋ねたところ、宜和殿畫士韓先生が革職して、此處に遊んでゐたので、これ



幸ひに招聘した。

こんな騒ぎの中にも西門慶は死者を追慕して已まなかつた。彼は一通り手配りが済むと、スグ靈前に坐し、飯も食はず茶も飲まず髪も梳かず泣き伏して、小廝や女中に當り散らした。月娘は心配して再三忠告したが、忠告すればするほど益々荒立つばかりで手の着けようがない。そこで玳安の計らひで應伯爵と謝希大を喚び寄せ、二人の巧言で旨くあやなして貰ふことにした。

二人は間もなく此處に馳せ付けたが、先づ靈前にひれ伏し型の如く大哭した後ち、漸く起き上つて西門慶に對し李瓶兒の死時をたづねた。

應伯爵はけさ四更頃歸宅して寝るに、不思議の夢を見た。それは西門慶が昇級して慶賀の宴を張り、大紅の禮服を着用してゐたが、忽ち懷中から二本の簪を出し

『惜しいことした』

こいふ。應伯爵は手に取つてみると、一本は折れてゐたが、それは名玉であつて、残つた一本はガラスであつた。云々である。

又西門慶も同じような夢を見た。それは東京の翟管家から六本の簪を贈られたが、その中一本瑕があつて忽ち折れた。同時に女中に起され李瓶兒の死を知つた。云々である。

恁んな話をしてゐる中に西門慶の悲しみは幾分紛れて來た。そこで應伯爵は二言三言眞面目な道理を述べ立て、例の巧妙な幫間術を以て忽ち西門慶の執着心を拂ひ除け、一處に朝飯を食つた

『不思議だねえ、玳安さういひ應二哥さういひ、私しきも女房の知らない術を知つてゐるよ』

と月娘は諸妾に對つて嘆息した。

六三

吳大舅、吳二舅、花大舅が悲報を聞いて馳せ付けた時、韓先生も來てゐた。韓先生は主人の需めに應じて、先づ靈前に近付き千秋幡を取除け、しづかに死人の相貌を窺つた。

艶の引けた唇に一點の紅をさし、黒光りのする鴉青巾を頭に戴いて安らかに眠つた顔は、生前にもまさる趣があるので、これを見た西門慶は又も涙に掻き暮れた。

『ふだん、もつこふつくらした顔立て、まことに秀麗なお方でした』

こ應伯爵はお太鼓を打つた。

『ゑゝ私しは見覚えがあります。五月一日岳廟で焼香してゐたのは、慥かに此方です』

と韓先生は繪筆を執り、繪の具を溶かし、注文二枚の内先づ半身像に取りかゝり、瞬く間に一副の美人畫を仕上げた。西門慶は手に取つてみるたが

『恁ういふものは女の方が目が利くものだ。奥へ行つて皆に見て貰へ』  
と玳安に渡した。玳安は間もなく戻つて来て  
『皆さんのお話だ、額の左の方が少し張つてゐて、眉が少し灣曲し、唇が少し扁たいさうで御座います』

ご取次いだ。韓先生は言はれた通りそれを改め、折柄到着した喬大戸に見て貰ふと  
『これは立派な出来映えだ。只呼吸しないのが如何にも残念だ』

と言ふ。西門慶は喜び、一疋の反物三十兩の銀を韓先生に贈り、出殯までにあこ一幅仕上げ、大青大緑を以て冠襖を齊整し、綾綾牙軸を以て表装されたき旨を述べた。韓先生は一々うなづいて辭し去つた。入りちがひに驗屍人が来た。西門慶は親戚の人達に告げた。

『けふは小殮です。三日目に大殮を行ひます』

驗屍人は紙割を巻き衣衾を敷き遺骸を整理した。西門慶は開光明を行ふため無理に陳敬濟を孝子(喪主)になし柩前に在つて目を拭はせ、又一顆の明珠を死者の口に含ませ、型の如く小殮畢り

再び家内の者が集つて號泣した。その時來興は冥衣舖から四座の人形を買つて来て棺側据わたり即ち堆金瀝粉、捧盆、巾盟、櫛毛女兒さいふものである。そうして靈前には葬爐、商瓶、燭臺、香盒の類を置き、新調の銀爵盞二組を並べ、又應伯爵と相談して葬禮の役割を定め、先づ銀五百兩と錢一百吊文を備へ、韓夥計を會計係とし、賁四と來興が買物係兼外廚係、應伯爵、謝希大、温秀才、甘夥計が接待係、崔本は孝帳係、來保は外庫係、又王經は酒の出し入れをなし、春鴻、畫童は靈前に伺候し、平安は四名の排軍と共に大門に於て受附をなし、悼客の姓名を控え香紙を送り、別に夏提刑から送られた一人の書記と四名の排軍が帳簿を預つて事務をたすけ、壁上に此役割を記し、各固く相守る旨を記した。

靈内相は皇庄にあり、官の土木材料を預つてゐたが、西門家の弔事を聞き、早速お手のもの杉丸太六十本、毛竹三十本、蘆蓆三百枚、麻繩百條を送つて來たので、これは大に便利をなし、東西に轅門を設け、正面に綵棚を作り、白絹を絞つて美しく結び飾つた。又報恩寺から十一名の僧を邀へて道場を開き誦經懺悔した。

温秀才は孝帖の刊行に就いて西門慶の指圖を受け、荆婦奄逝云々を認めしたが、禮儀に悖るのが氣に掛り、そつこ草稿を應伯爵に見せた。

「吳氏さいふ正妻があるのに、此文字は甚だ不穩當だ。強ひて用ゆれば物議を起す基だ、吳大哥がこれを見たら決して面白くは思はなからう、宜しい、私が旨く話してあとで改めさせよう」

「應伯爵は引受けた。晩になつて客は皆散じたが、西門慶は奥に入らず、李瓶兒の靈側に一張の涼床を置いて獨宿し、天明に至つて初めて月娘の部屋に入り、面を洗ひ髪を梳き白唐巾を戴き孝冠、孝衣、白絨靴、白履鞋、經帶を以て身を裝し、再び前廳に立出でた。此時夏提刑は弔問し書記役なき見廻り若し怠業する者あらば容赦なく衙門内で懲治するなきを警しめて辭し去つた。

吳銀兒は二日目の今やうやく顔を出し、靈前に銀紙を供へた後ち、すぐ上房に馳け付け、月娘に挨拶した。

『乾女兒カンニョルが乾娘カンニヤンの死を知らずにゐるこは迂濶ですね』

と側カニにゐる玉樓から油を榨られ、吳銀兒は冷汗かいて遅刻の辯解した。

『お前さんが見舞ひに来るのを忘れても、あの人はチャンと遺物を残して置きました』

「月娘は忌味を言ひながら、小玉に吩咐けて預かつてゐた袱紗包を取寄せた。開けてみるこ中には一襲の緞子の衣服ミ、二本の金頭簪と、一本の金花キヲがキラ／＼と目の前に光つたので吳銀兒は今更顔を掩うて哭き出した。月娘は茶をもてなし

『三日目が大殮ですから、今からズツと此處においでなさい』

さいひつけた。

三日、和尚は朝早くから道場に入り、磬を打ち經を誦し紙錢を焼き、陳敬濟は孝服孝帶を帯びて靈前に拜跪し、家内一同喪服姿で其跡に立ち聲を上げて哭いた。親戚朋友近處の者も皆集つて禮拜し、紙錢は山の如く焚かれた。やがて陰陽徐先生の祭告あり。畢つて遺骸を棺の内におさめ四套の衣服を掛け四錠の銀を入れた。花子由はこれを見て

『金銀は世に出たがるもので、屍體保存の上から決して棺内に藏めるのではありません』

と忠告したが西門慶は肯かず、其まゝ七星板を掛け、忤作に命じて蓋を覆ひ長命針を打つた。

そこで又一同聲を揃へて哭いた。

『我が年若の姉よ、あゝこれで再びお前を見る事が出来ないか』

と西門慶は又も泣き口説いた。杜中書さいふ人は真宗寧和殿の侍講であつたが、今閑散の身になつて此處にゐるのを幸ひ、題旌を依頼した。西門慶は捲棚内に杜中書を請じ入れ、酒饌を献じた後ち、大紅官紵一卷を面前にひろげ

『詔封錦衣西門恭人李氏柩の十一字にして欲しいのです』

といふ。應伯爵は旁に在つて

『正室夫人があるのですから、こゝういふ文字を用ゐてはごうかと思はれます』

さいふ。杜中書はわけなく打消し

『男子を産んだ人ですから、禮儀として差支へありません』

温秀才は伯爵の肩を持ち

『恭人は爵ある人です。室人ならば一向差支へありません。即ち室内の人といふ意味で婦人の通

稱です』

と説き、結局杜中書は白粉を以て

『詔封錦衣西門室人李氏柩』

と題し、詔封の二字に金箔を貼り、衆議を丸く納め、次に木主を題して立去つた。

此日喬大戸、吳大舅、花大舅、韓姨夫、沈姨夫は家々に三牲を供へ紙錢を焼いて靈を祭つた。

又喬大戸娘子、吳大姉子、二姉子、花大姉子等は轎に乗つて西門家に来り、死者を弔ふた。月娘等は髪を孝髻に結び、麻の衣麻の裙麻の帯といふ打扮ちで、弔客を後邊の客堂に請じ入れ、茶を出し齋を薦めた。中にも花大姉子と花大舅が重孝で餘は皆輕孝であつた。李桂姐も此日初めて弔に來たが、これは縁が遠いので何人にもこがめられなかつた。

初七日には報恩寺の大衆十六名、主座の僧に引率され、西門家に入り、水陸の大道場を築き、法華經を誦し水懺三昧に入つた。又玉皇廟の吳道官も出席して弔辭を述べ二七經を誦した。又韓先生は李瓶兒の全身像を抱へて來たが、これは金翠の圍冠を戴き雙鳳の簪を挿し、大紅の粧花袍

を着て馥郁たる粉面は宛ら生けるが如き出来映えに、西門慶の喜び斜ならず、酒飯をてなし潤筆料を充分與へて謝禮した。

正午近くなり喬大戸は猪羊、金銀山、緞帛、綵繪、冥紙、線香等の祭品五十餘台を昇き入れ鑼鼓細樂を奏して祭事を行つた。喬大戸側の友人、尙舉人、朱堂官、吳大官、劉學官、花千戸、段親家等も參列して靈前に香を献じた。陰陽生は祭文を読み上げた。

『維れ政和七年、歳は丁酉、九月庚申朔、越つて二十二日辛巳、眷生喬洪等、謹んで剛鬣柔毛を以て庶くば之れが奠を羞め、故親母西門孺人李氏の靈を致祭す。曰く嗚呼孺人の性、寛裕温良家を治めて勤儉、衆を御して慈祥、克く婦道を全うし、譽れは郷邦を動かす。夙に君子に聘せられ聘効鸞鳳、藍玉已に種る、浦珠已に光り、正に琴瑟諧ひて永く享彌を無疆に受く。なんすれぞ一病、黄梁を夢斷す。善人の歿、孰れか哀傷せざらん、弱女襁褓、姻嬙を沐愛するも期せずして中道、天、願ひに従はず、駕伴行を失し、幽冥隔たるを恨む。行藏を覩るなし、悠悠たる情誼を此一觴に寓す。靈それ知るあらば、來り格し來り歎し、尙ほ饗けよ』

これで客祭畢り、男連の禮拜あつて後ち女連の禮拜あり、男客は捲棚内に坐し女客は後邊に集つて各三湯五割の饗應を受けた。折柄本府胡府尹の來弔を受け、西門慶は慌てゝ孝衣を着換ひ靈前に伺候し、温秀才は素衣姿で出迎へ、左右より香紙を捧げ、祭場に案内した。胡府尹は素衣金帶を着用し、數多の供人に圍繞されて進香し、弔問の挨拶あり、少憩の後ち辭し去つた。

次の日は廓の鄭愛月兒が餅餽、三牲、湯飯の類、八盤を靈前に供へ紙錢を焼いて奠祭した。吳銀兒、李桂姐は各銀三匁の香奠を手向けた。晩になつて海鹽子弟の演劇あり、李銘、吳惠、鄭奉鄭春も應援した。西門慶は大棚内に十五台の食卓を設け、數十個の大燭を點じ、喬大戸、吳大舅、吳二舅、花大舅、沈姨夫、韓姨夫、倪秀才、温秀才、任醫官、李智、黃四、應伯爵、謝希大、祝實念、孫寡嘴、白賚光、常峙節、傅自新、韓道國、甘出身、賁第、吳舜臣、及二人の外甥、并に近處の者六七人と共に着席し杯を擧げながら芝居を見た。又下廳の左邊に簾を垂れ、吳大妗子、二冷子、楊姑娘、潘姥姥、吳大姨、孟大姨、吳舜臣媳婦、鄭大姐、段大姐等に春梅、玉簫、蘭香迎春、小玉が附添つて觀劇した。月娘其他の姊妹は右邊に在つてこれも簾を卸してみてゐた。演

題は玉環記で韋臯と玉簫の二世姻縁を仕組んだものである。小玉は劇中の人物玉簫に興味を持ちその濡場を見た時、同じ名の玉簫の肘を頻りに小突いた。その時鄭紀正が茶菓子運んで来たので、春梅は受け取り吳大脚子に渡さうとした時、芝居に夢中になつてゐる小玉は

『そらお前さんの御亭主が来たよ。鶉母が客を取れよ、あんなに八釜しく言つてゐるぢやないか早く出てお上げよ』

と玉簫を簾外に突き出した。玉簫はよろこびて菓子盆に衝突し、茶碗を傾けたから堪らない豪か茶の湯を浴びた春梅は怒るまいことか、例の調子で大聲上げて怒鳴つた。

二世姻縁を見て泣いてゐた西門慶は遙かにこれを聞き付け、小廝をやつて月娘に注意し小玉を奥の間に逐ひやつた。三人の藝妓は應伯爵の要求に依つて客席に現はれ酒間を斡旋したが、孰れも白綾對襟の上着に藍緞子の裙を穿き、けふは唱はず取り澄ましてゐた處、中々しほらしくなまめかしかつた。

演劇は五更まで續き、西門慶は大盃を以て酒を薦め、諸客充分酩酊して夜の白む頃漸く席散じた

### 六四

明け方玳安は御馳走の剩物を下けて店へ来た。フホーチーカン傅夥計は炕の上に横になつてゐたが

『随分今度は大袈裟にやつたものだね』

と先づ口を切つた。玳安は一杯飲み乍ら

『忍、あの方は福分はあつたが、惜しいことに壽命は無かつた。旦那はあれだけ金を使つたがあの人の持參金を考へてみれば鼻糞のようなものです。それは誰れも知らないが私はよく知つてゐます。金銀は申すに及ばず珠玉寶石衣類等を數へ上げたら連も一萬や二萬の物ではありません。旦那がお歎きになるのも無理はありません。人よりも金だ。又金は別としてあゝいふ好い人は二度と此世にありません。目上に對しても目下に對してもいつものにこやかに笑顔を見せ、會て出過ぎたこともなく悪口を言つたこともなく、そうして好く行き届いてゐるので、數ある奥さん方

もあの人のお蔭を蒙らぬ者は恐らくありません。一家の内であの人から随分金を借りた人もあつたようですが、返せば可し、返さなくとも可しといふ風だから、誰れも返す者はありません。それでも人に告げ口したこともなく、否な顔を曾て一度見せたこともない。私しぎもの買物でもわかります。あの人はいつも銀を秤に掛けたことはなく、只極く好い物を買つて来い。剩ればお前にやるごいふのです。處が二娘五娘と来ては一々秤に掛け、分厘の間違ひがあるご散々毒付かれた上、損害賠償をやらされるのだから溜りません。大娘三娘は其點は少し分つてゐますが、大體氣六つかしい方で時としては随分手古摺ります。これから屹度五娘の世界になるでしょうが、庭に狗の糞が一つころがつてゐてもガミ／＼言はれ、それに出すものは人一倍にケチだご来ては奉公人は逆もやりきれません』

ご玳安は酔に乗じて矢鱈に喋つたが、そのうち傳夥計の返詞がなくなつたので、自分も倒れ伏し、日が三卒に及ぶまで熟睡した。

李瓶兒の死去以來、西門慶は靈前に起臥したので、玉簫は前邊に来て床の上へ卸しやら、着物

の出し入れをなし、わざご仕事を手間取り書童ごふざけてゐたが、その日西門慶が上房に入つたのを幸に、書童ご諜し合ひ、花園内の書房に入つて朝つばらからケシかる振舞ひに及んだ。

金蓮は其朝早く起きて前廳に来て見るご、そこらは卓やら腰掛けやらでゴタ／＼に取り亂してある。書童は庭を掃いてゐる。

『馬鹿野郎、お前一人で働いたつて何が片附くものか。みんな何處へ行つた』

『みんな寐てるます』

『寐てるなら起しておいで、そうしてお前さんは陳姐夫の處へ行つて白絹を一疋持つて来てお呉れ、潘姥姥の孝裙が無いのだから』

書童は箒を投げて出て行つたが間もなく歸つて来て、それは敬濟の係ではなく書童の係だごいふ。書童は何處へ行つたと訊く。書童は花園の書房で髪を梳いてゐるごいふ。金蓮は花園の書房に近付いた時、内で人の笑ひ聲がするのですぐ飛び込んで見るご、書童ご玉簫は炕の上で抱き合つてゐたが、喫驚して離れ、甚だ不體裁な有様で地に跪いて憐みを乞ふた。



『まあ采れた奴等だ。お葬式のドサクサ紛れを附け込んで、其ざまはなんだ』  
『ごうぞ奥さん、見遁がして下さい』

こ二人は額を地にスリつけた。

『お前さんは何も言はなくとも言ひ、孝絹を一疋持つて来て潘姥姥に渡してお呉れ』  
こ書童を立去らしめ、偕て玉簫に對ひ

『今まで始終こんなことをしてゐたのだらう』  
と冷笑つた。

『いゝね、たつた一度です』

こ玉簫は眞面目になつて答へた。

『一度だか何度だか知れないが、それはどうでも好いとして、これから三つの條件を固く守れば  
私しは見遁がしてやる』

『はいく私しは如何なる仰せにも背きません。三つの條件とはごういふ事で御座います』

『第一大娘の身の廻りにあつた一切の出来事を私しに告げる事、若し私しが他から聞いて初めて  
知つた場合にはお前をゆるさぬ。第二私しが頼んだ件に就いてお前は極力探索するこゝ、第三大  
娘は今度俄に妊娠したようだが、これには何か曰くがあるか。サア今知つてゐるこゝを残らずお  
話下さい』

こ言はれて玉簫は早速妊娠の件に就いて薛姑の衣胞の藥を飲んだこゝを語つた。

書童は此事あつて以來、何となく氣が引け、書房内に出し入れする贈答品のハンケチやら現金  
やらチヨロマかし、又主人の吩咐を偽つて傳夥計から二十兩の銀を引出し城外に不足の白絹を買  
ひに行くこ言つて家を抜け出し原籍蘇州へ向け出奔した。西門慶は怒つて地方官に逮捕方を乞ふ  
たが既に及ばなかつた。

話は戻つて其日の午後、薛内相と劉公公の會葬があつた。薛内相は棺材を見て頻りに譽めそや  
し、これは建昌でなければ鎮遠だ、こ言つたが當らなかつた。然らば楊宣楡より外にないこ言つ  
たが、それも當らなかつた。應伯爵は説明して、楊宣は薄いがこれは厚い、即ち楊宣の上に位す

る桃花洞である、此洞は湖廣武陵の川中にあり。人跡罕に到る處で、昔唐の一漁父が洞内に入つて秦時の毛女を發見したのは此處である。故に此木の貴さ知るべし、といつたので流石の内相も舌を捲いて感嘆した。餘興には海鹽の子弟の『李白好んで杯を食る』の一劇を演じたが、南曲に通ぜぬ内相は少しも興味を持たず、彼等の間に勝手に時事を語つてゐた。

其頃宮中にはいろ／＼不祥が重なつた。或る時は豪雨頻りに下り内裡の神殿に落雷して鴟尾を碎き、官人中數多の死傷者を出した。又立冬の日、聖上大祭を行ふため太廟太常寺の掃除を命じたところ、故なくして磚崩れ、其隙間からなま／＼しい血潮が流れ出し殿の東北の地面が急に陥落した。そこで十日間家畜の屠殺を禁じ罪人の處刑を歇め、百官の上奏を中止して天に祈禱したが何の驗しもなく、大金は内地三鎮の割讓を求め、蔡京は聰明を覆ふて之れを許したので益々天下の人望を失つた云々と。

## 六五

十月八日は四七日に當り、家では寶慶寺の衆僧が誦經し、城外の專管墓地では陰陽徐先生墳土を開き、其上に三間の大日除けを設け、隣地の者を喚び集めて饗應あり。越れて十一日弔歌打鼓の催しあり、『五鬼、判官を鬧かす』張天師、鬼に扮して鍾馗を迷はす『小鬼老子、函谷關を過ぐ』六賊 彌陀を鬧かす『雪裡の梅』莊周蝴蝶の夢『天主、水火風を地に降す』劉洞賓、劍を黃龍に飛す』なごの戲が邸内で行はれた。

次の日は愈々出棺の當日で早朝から大混雜を呈した。先づ弓箭を負へる五十名の騎士を周守備から借り受け、内十名は日宅を警備し他の四十名は柩を守つてゆく。柩は人夫六十四名を以し昇き、女婿陳敬濟、杖を執つて徒歩し本家親戚の女族を乗せた百十餘頂の轎と、三院妓女の小轎數十頂その跡に従ふ。西門慶は麻冠孝服姿で親友と共にすつと後ろの方にゐた。

定刻に至り先づ鼓を打ち鈴を振つて行列は徐々に進發した。九尺の紅羅に大書した銘旌は晴れやかな空に翻り、開路鬼といふ張子の大人形が輓轆で引かれゆく跡から擔金斧、乘銀戈といふ古代の武器を持つ者あり。八洞仙は龜鶴を遶らし四毛女は虎鹿を隨ふ。採蓮船を送る者は滑稽の身振りをなし、甲冑頂盛に身をかためた者は高欄に乗りて歩む。十六名の小道士は霞衣道髻の姿やさしく、二十四名の布袋和尚は金欄の袈裟眩ゆし。十二座の大絹亭あり、綠舞ひ紅飛ぶ。二十四座の小絹亭あり、珠を圍み翠を繞らす。左に大倉あり、地庫と連る。右に金山銀山あり、隊をなしてゆく。掌醢厨あり、八珍の確を列ぬ。香燭亭あり、三獻の儀を供ふ。六座の百花亭あり、千團の錦繡を現はす。一乗の引魂轎あり、百結の黄絲を垂る。此處に飾花と雪柳あれば彼處に寶蓋と銀幢あり。金字旛銀字旛は棺輿を護り、白絹繖と綠絹繖は僧架を圍む。功布は微風に搖ぎ眷族の哭声高し。排軍は纜を執つて進めば騎士は人を拂つてゆく。

此日張團練は二百名の軍士を引き具して參列し、劉薛二内相は早くより葬場にあつて待つ。吳道官は大紅五彩の鶴氅、九陽の雷巾、登丹寫等に身を固め、牙笏を執つて靈前に現はれ高らかに祭

文を讀み上げ、銅鑼銅鼓の喧囂の中に冥器を燒き、徐先生は件作を従へて弔辭を呈し、己の刻に至つて土を掩ふ。西門慶は一對の反物を備へて周守備に點主を乞ひ、月娘は魂轎神主魂旛を抱いて泣き、香燭紙錢の火焰みなぎる中に事終つた。

如意兒は毎日故人の空部屋を守つてゐたが、西門慶は此日歸るとすぐそこに入つて李瓶兒の肖像の下に臥した。如意兒は年満ではあるが色白の肥り肉が何處か故人に似通つてゐるので西門慶はそゞろ心となつて引寄せ、翌日は故人の簪など出して與へた。

十八日かういふ急がしい中に黃太尉の歡迎會が行はれた。それは先月二十九日黃主事が來弔した際に、宋御史の意を傳へ、今度勅命に依つて江南の花崗石(良嶽建築用)運輸の任に當つた官吏の招待宴を開くため、二十二名の地方官が百六兩の銀を集めて西門慶に依頼したのである。黃太尉は朱太尉と關係がある、宋御史は大事な人だし、黃主事は蔡主事の親友だし四方八方の關係から西門慶は已むなく引受け、自邸に於て盛宴を開いた。正賓は太尉、陪席は巡撫巡按、布按三司あり、又主人側は八府官の歴々ばかり集つたので金は隨分費ゐたが可成りの光榮に浴した。

六六

二十一日この日は李瓶兒の五七日に當り吳道官は黃真人を招聘して西門家に來り、故人のために盛大なる追悼會を行つた。これは應伯爵の口入れて斷り兼ねて應じたのであるが、もとく道教の信者である西門慶は決して否やとは思はなかつた。先づ門前に長旛を懸け、榜文を掲げ、門面に一對の黃紙を貼つた。それは

東極垂慈仙室乘晨而超登紫府

南丹赦罪淨魄受煉而逕上朱庭

こいふ聯であつた。黃真人は九陽雷巾を戴き大紅金雲白百鶴法鬘を着て表白文を読み焚香淨壇

飛符召將、關發一應、文書符命、辱奏三天、告盟十把等種々の作法あり、夕方太乙慈尊降賀來、夜壑幽關次第開、童子雙々前引導、死魂受煉步雲階

ご偈を宣して水池火沼を設け、穀物を投げ入れ、水火煉度を行ひ  
太微迴黃旗、無英命靈幡、攝召長夜府、開度受生魂

と奏請して先づ魂幡を水池内に安置し、結靈符を焚き、次にこれを紅幡に換ひ、爵儀符を焚き更にこれを黃旗高功に換へ、天一生水、地二生火、水火交煉、乃成眞形と念じた。これを煉度といふ。又神主を請ひ受け冠を着せて金橋を歩ませ、玉陛に朝參し三寶に歸依し、玉清に朝した。茲に於て衆道士は五供養を舉げ、畢つて高功をなし。既に三皈を愛す。當に九戒を宣ふべしといつた。九戒畢つて衆道士は音樂を奏して神靈を門外に送り、財を化し箱庫を焚いて返へり、齋功圓かなりご宣して凡べて行事畢つた。西門慶は喜んで道士の勞を謝し、酒飯をもてなし、厚く禮物を贈つてかへした。

此日翟謙は遙るる東京から書を寄せて哀悼し、香奠として十兩銀一封を贈つて來た。其書の末に楊戩が獄中で死去したことが記されてあつた。

二十二日裝飾屋が早朝からやつて來て、綵棚天幕その他一切の葬式設備を撤去した。

月娘は西門慶に、けふ一日衙門を休んで連日の疲勞を癒やしては如何、ご勧めたが肯かず、花園の書房に入り、床屋の小周兒を喚んで髪を梳かせた。そこへ應伯爵は毡帽、綠絨襖子、皂靴棕套といふ物々しい防寒姿で伺候した。

『けふはそんなに寒いのですか』

ご西門慶は聞いた。

『あゝ寒い何んのつて、いまに屹度雪が降りますよ。ゆうべ雞が啼く頃歸つたので酷く疲れたが、貴方は相變らず御元氣ですな。髪など梳いて何處へかお出掛けですか』

『今も家内に留められたが、俺れは一向身體に障らないね』

と健康を誇つてゐる時、畫童が二盞の牛乳を運んで來た。それは酥油ご砂糖を加へて煮詰めたもので非常に滋養になるが、西門慶は伯爵に薦めたまゝ自分は見向きもしなかつた。彼は曾て後溪に在つた時、或る人から林眞人の合劑百補延齡丹を贈られ、人乳を以て服用せよ。彼は外觀魁偉であるが太極は虚であるご教わられ、且つ身邊人が多いので毎朝服用してゐるが、此二三日仕

事にかまけて忘れてゐたこと語つた。

温秀才は翟謙への返書を認ため西門慶の関覽を請ふた。先方には偉い學者が揃つてゐるからシツカリ頼むよと先日應伯爵の注意を受けたが秀才は馴れたものでソツなく書き上げてあつた。その時雪がチラ／＼降り出したので西門慶は外出を止め、伯爵、温秀才を相手に小酌を催した。恰度そこに鄭春が来て二つの盒を捧げた。それは鄭愛月兒が心を籠めて作つたハンケチと、同じく手製の蘇油泡螺兒といふ菓子である。西門慶は泡螺兒に就いて故人の手並みを思ひ出し今更非常な淋しさを感じた。

折柄黄四が銀一千兩を運び入れ、残りは次期まで延期して貰ひたいと申入れ、陳敬濟はそれを取次いだ。伯爵は側で頻りに黄四の不信を鳴したが西門慶は介意せず

『好く改めて受取つて置け。俺はけふ客があつて出られない』

と敬濟に吩咐けた。黄四は押して西門慶に面會を求めたので彼は遂に坐を立つて前廳に立ち出で、用向きを聞いた。

それは黄四の妻の弟孫文が父の手代と喧嘩し雙方負傷したが、手代の方が傷重くその原因で傷寒病に罹り遂に死亡した。手代は店の棉花二捆を胡麻化した罪人であるが、父の馮二は白千金といふ巨盗と姻戚關係あるを幸ひ其尻押しで官吏を買収し孫文を獄中に投じた。黄四は泣いて此取下げ運動を西門慶に依頼し、白米一百石(銀百兩)の目録書を捧呈した。場所は東昌府、係官は雷兵部である。

西門慶は雷兵部は識らぬが鈔關の錢老爺は識つてゐる。錢老爺は同年の進士であるから、彼に頼めば恐らく旨くゆくだらうと答へ、目録書を戻き突した。應伯爵はいつしか側に来てゐたが、百兩の銀を見るに夢中になつて西門慶を勸告し、遂に一書を認ため玳安を東昌府に急派した。

二十四日、可成り前から計畫中の反物仕入の件は不幸やら何やらで延び／＼となつてゐたが、この日漸く準備成り紙錢を焼いて門出を祝し銀六千兩を官船に載せ、韓夥計、崔本、來保、榮海、胡秀の五人同船で出發した。内二千兩は崔本が湖州に止つて、紬を買ひ、残り四千兩は韓夥計と來保が松江へ廻つて綿布を仕入れるのである。

二三日の後ち玳安は歸つて來た。雷兵部は錢主事の手紙を見ると急に再調べをなし、孫文は過失殺傷の廉で十兩の慰弔料を馮二に贈るべく且つ七十杖の笞刑を罰金に替へて無罪放免された。黄四は非常に喜んで、舅と共に明日禮に來る由を語つた。

西門慶は此話を聞き終つた頃、何さなく睡氣を感じ炕上に横たわつた。王經は衾を掛け、卓上の小篆に一炷の香を薫じてそつこ立去つた。入り交かひに簾を掀けて這入つて來たものがある。見ると李瓶兒は糝紫の衫、白絹の裙さいふ姿で髪もおごろに黄ばんだ物憂けな顔付きで床前に立つた。

『おや貴方は此處に寐て被在しやるの。風邪曳くといけませんよ。私しは其後彼奴のお蔭で獄屋に入れられ、時々刻々と血が流れ出し汚くて堪りませんでした。きのふ貴方の附け届けの利き目で罪三等を減ぜられました。彼奴は中々斷念せず、今度は貴方を相手取り、告訴すると言つてゐるから、これから決して油斷してはなりません。外へ出てほしいが御酒を成丈け控え目にして夜早く歸宅して下さい。決して忘れてはなりませんよ』

といふ。西門慶は悲しく

『姐姐、そうしてお前は何處へ行く』

こ取りすがつた時、李瓶兒は手を振拂つて姿を消した。かこ思ふこ目が覺めた。

そこへ金蓮が這入つて來て、寐てゐる顔を覗き込み

『貴方、何を开んなに泣いて被在つしやるの』

『いや俺れは泣いてゐやしない』

『嘘を被仰い。眼のふちが赤いよ』

『實は今夢を見た處さ』

『その夢は心上人ですか、心下人ですか。私しは心外人だから逆も貴方の夢の中には這入りさうもない』

『一體それは何の意味だね。俺れにはわからない』

『心上人は李瓶兒です、心下人は近頃出來た如意兒の事さ』

『馬鹿をお言ひでない。开な事があるものか』  
『處の生憎部屋が近いので毎晩聞こえるから仕方がない。好い年をしてあの婆も随分馬鹿にしてゐるよ』

『それはそうさ、李瓶兒にはぎんな着物を着せてやつたかね』

『それを聞いてさうなさるの』

『いや一寸思ひ當ることがある』

『上着は貴方も御存知でしょう。大紅遍地金緞子の衣服と白綾襖黄紬の裙です。下着は紫綾小襖と白絹裙です。肌着は大紅の小衣です』

『ウムそうか。だからあんな風をしてゐたのだな』

『西門慶はじつと考へ込んでゐた。』

十一月二日故人の遺志に依り家中に二人の尼を招き血盆經を誦した。此日黃四は訴訟事件の禮心で妓院に酒席を設け西門慶の來臨を請ふた。彼は前日夢を思ひ出し何となく氣が向かなかつ

たが、應伯爵が頻りに勧めるので、遂に温秀才を引連れて午後から出て行つた。先方は近頃盛んに水を向けて來る鄭愛月兒であるから、行つて見れば面白からぬ筈はなく、うかく深酒して翠帳紅閨の娛しみに耽つた。鄭愛月兒の話に據るに李桂姐は此頃頻りに王招宣府の三官兒に取り入り、二人は水も洩さぬ仲ださ聞いて西門慶は腹を立て、早速馬を乗り替へる積りで、毎月三十兩で鄭愛月兒を院内に圍ふさ云つた。鄭愛月兒は、それほさは要らぬ。月々二十兩に極めて置いて些少の金を老嫗にやれば充分だと言つた。西門慶は大に喜んだ。

王招宣府は名家あるが息子はあゝいふ道樂者で立派な新夫人あるにも拘はらず内を外にし、又母夫人息子以上の浮氣者で文嫂を手先きに遣かひ、極めて巧妙秘密な手段で密夫を邸内に引入れてゐる。それは鄭愛月兒を梳篦した南方商人で一年一度此處に來る者が二度許りそこに寐泊りした事がある。あの老太太を手に入れたら自然小太太も手に入るわけださ鄭愛月兒は語つた。西門慶は好い事を聞いたさばかり喜んで其夜遅くまで遊んで歸つた。

王招宣府の老太太は今年三十五の女盛り、一見まことに上品な婦人であるが、夫に別れて久し



くなり閨淋しさの餘り、時々寺詣りをして和尚と關係したり、或は文嫂の周旋で密夫を家に引入れ憂さ晴しをしてゐたが、流石に息子の放蕩に就いては心配してゐた。處が今度文嫂の口入れで提刑所の西門慶が秘密にその誕辰祝ひをしたいと申込んだので、林太太は一つは自分の娛しみ、又一つは其権力を利用して遊び狂ふ俸の足止めをしたいと思つた。そこで或夜竊に西門慶を自宅に招き入れ、右の話をした後ちわけもなく關係を結んだ。

三官兒は太原節度使頌陽郡王、王景崇の孫で武學を學べは早く出世の道がつくのだが何しろ父兄に早く別れ家庭が亂れてゐたので、少年の頃から惡所通ひを初め、今やうやく二十歳になるやならずの勉強盛りを毎日ゴロッキ帮間に取りまかれて飲めや唄への馬鹿騒ぎをしてゐる。西門慶は夏提刑と相談して光棍が良家の子弟を誘惑するは好くないことだと早速探偵をつかはして取調べ、孫寡嘴、祝實念、小張開、聶鉞兒、向三、于寬、白回子、又藝妓側では李桂姐、秦玉芝兒の名を擧げた。そこで筆を執つて李桂姐、秦玉芝兒を消し、又孫寡嘴、祝實念を消し、残り五人の者を逮捕して各二十大棍を啗らはせ懇々説諭し放免した。五人は好く考へて見るに西門慶の關係

者孫寡嘴、祝實念、李桂姐、秦玉芝兒は皆逮捕されずゐるので、偕ては東京からの命令でないと悟り、すぐ其足で李家に來り、いくらかいたぶらうと思つたが、そこは鐵桶の如く閉ぢてゐたので、是非なく王招宣府に到り王三官兒に面會を求めた。王三官兒は慌て、母親に救を求め、結局文嫂が西門慶に出入りするといふ話を聞いて、先づ五人の者に酒食を饗應し、自分は裏口からそつこ忍び出で文嫂の紹介で西門慶に面會し、五十兩の禮金を贈つて右の事情を叙べ即刻彼等の處分を請うた。西門慶は禮金の受納を拒んだが、仕事の方は快く引受け、時を移さず一名の節級と四名の排軍を王招宣府に遣はし、酒を飲んで好い氣になつてゐる光棍等を片端しから引立て、西門家に連れ來り、先づ指責めの刑を加へ

『汝、良家の子弟を誘惑して處分を受け乍ら、少しも前非を悔るす、脅喝取財を行ふ。不届至極の奴なり。明日衙門に護送して嚴重に處分するからそう思へ』

と申渡した。光棍等は全く改心した體で涙を流して謝罪した。西門慶は餘り深入りしてもなまいと、好い加減な處で固く將來を戒めて放免した。此事あつて以來王三官兒は深く西門慶を德

こし、母林太太の勧めに依り、遂に義父義子の約束を結んだ。林太太はこれを好い事にして俸の放蕩を戒め、一方西門慶は交際を繁くし、時々秘密裡に自分の情慾を満足し、果ては王六兒が會て行つたように淫婦身を焼くさいふ淺間しい事までもして遊り下つた。應伯爵は王三官兒が拜帖を投じて、西門慶の救を求めたと聞いてすら喫驚りしたが、若し林太太に斯ういふ情事があるさ知らせたら恐らく目を廻したかも知れない。だが家柄は家柄で情慾は情慾だ。そうして如何に名家でも現在の勢力が必要だ。林太太が醜事を行ひながら恚ういふ後ろ立てに依つて保護を求めたのは洵に無理のない事情がある。

李桂姐は全く西門慶に見限られた。實際自分もまきまりが悪く當分出入りが出来ないが折を見て何さかしようと思つてゐた。

十一月十日内外官吏の大更迭があつた。夏提刑は一級進んで京官となり鹵簿の職に榮轉した、がこれは身入りが少いので大に失望した。西門慶は夏の跡を襲ひ、山東提刑所正千戸に任ぜられ同副千戸は何太監の甥何永壽に辭令が下つた、西門慶の陞進は翟謙の取りなしであつたが、斯う

いふ小官は兎も角、巡撫巡按御史、侍郎尙書に至るまで陞級榮轉した者は皆蔡京一味徒黨であつた。尤も李邦彦、王煒鄭、朱勳、黃經臣などの別派もあつたが、いづれも蔡京と協調して悪政を行ふ一穴の貉であつた。

十二日西門慶は夏提刑と共に東京に向け出發した。夏は家財一切をまとめ二十餘名の家族を引具して数日の後ち東京萬壽門内の崔中書家に投じた。西門慶は相國寺に宿借る筈であつたが夏の勸めにより崔家に同宿し中書に面會して種々禮を叙べた。そうして翌日は夏と共に翟謙を訪ひ、数々の禮物を贈つて蔡大師の引見を求めたが、其日良獄新に成り聖上臨御し蔡京は主祭の任に當つたので暇がなかつた。翟謙はそつと西門慶を別室に招き入れ、今度夏提刑は原職に執著し林千戸から運動して蔡大師と朱太尉を説いたが、何しろ山東副千戸に擬せられた何永壽は寵妃劉娘娘附きの太監の甥でこれは決定的に動かすことが出来ない。強ひて夏を原職に在らしめれば西門慶を免職しなければならぬ。そこで翟謙は極力太師を説いて夏を轉任させたのである。これは前に内報したのが恐らく洩れたのだらう。將來慎んで呉れ、さいふ話である。西門慶は愕いて翟謙に

謝した。

次の日西門慶は夏提刑と共に青衣冠帯して午門前に至り聖恩を謝した。西闕門外に退いた時一青衣の男が、何太監の命を傳へて西門慶に面會を求めた。

何太監は新任副千戸何永壽の伯父で、甥の執務に就て同僚西門慶の教導を請ひ、且つ邸宅を求めたいと語つた。幸ひ夏提刑の屋敷が空いてゐたので、原價千二百兩で紹介し、賁四、王經、玳安は雙方から充分の禮金を受けた。恁んな事で西門慶は何千戸に喜ばれ或日盛大な招宴を受けて其屋敷に泊つた。すると眞夜中過ぎて人靜まり

月色明らかな花木湖山の中から忽ち李瓶兒の姿が現はれ、書院の枕頭に立つた。彼女は前と同じような事を云つて西門慶を諫め、二人は抱擁して充分思ひを晴らしたが、醒めてはこれも一場の夢、曉の風冷やかに褲子は氣味悪く濡れてゐた。

明くる日西門慶は相國寺の智雲長老を訪ひ、東街を過ぎ造釜巷に入つた時途中二枚扉の白板門を見出した。それはゆゑの夢に李瓶兒が指示した家と寸分違ひがないので不思議に思ひ、隣家

の豆腐屋に聞くに、袁指揮家の故宅と答へた。西門慶は急に身の毛立つて碌に突留めもせず崔中の書家に歸つた。

次の日は文武の百官が宮廷に集り即位二十年祝と良嶽落成を賀した。西門慶何千戸等は五更頃から漏院に伺候し東華門の開くを待つて進入し、きらびやかなる顯官の背後に在つたが最後に朱太尉が提刑官二十六名の改補を奏上し、聖旨下り、二十六名は招かれて遙かなる位置に列なつて拜謁し式畢つて散じた、それから衙門に行つて簡符を受取り掛號をなし萬事滞りなく終了して十一月二十日東京を出發し同二十四日清河縣に到着した。何千戸も一處に赴任の途に就いた。

留守中金蓮と如意兒はふだんの嫉妬を破裂させ、洗濯棒貸借の事から大喧嘩を初め、賁四の妻と孟玉樓か中に這入つて取鎖めたがおさまらぬは胸の中、西門慶が歸つて來た時、二人は寵を爭ひ互に讒訴した。

應伯爵は過日男子を儲け西門慶から五十兩の銀を借り、二十八日は彌月(滿一個月)の祝ひで吳月娘其他の來臨を請ふた。金蓮は毛皮の着物が無いと言つて拗ね、李瓶兒の大紅遍地金鶴模様の

袖、白綾襖をネダつた。西門慶は鑰を上房から取寄せ、六房に入つて箱を開けた時、側で見てるた如意兒は私しも着物が無いと言つた。そこで翠蓋緞子襖、黄紬裙子一襲、藍潞紬綿褲一件、粧花膝褲一雙を如意兒に與へた。月娘は甚だしく感情を害した。何しろ金蓮に與へた物は時價六十兩の上等裘で月娘も内々それを覘つてゐたのであつた。

二十七日は孟玉樓の誕生日であつたが、金蓮は西門慶を早くから己が部屋に連れ込んだので月娘は怒つた。けれど來客の手前を憚つて我慢してゐた。次の日は應伯爵の招待で月娘以下の妾はうち揃つて家を出た。留守中春梅は申二姐を大罵倒した。それは春梅が申二姐を呼びつけ歌を頼まふとしたが應せず、上房に在つて吳大妗子の相手をしてゐたのが癢に障つたのである。申二姐は泣いて辭し去つた。

夕方歸宅した月娘は、吳大妗子から此話を聞いて少なからず氣色を悪くしたが、西門慶は一笑に附し、あした申二姐に一兩届けてやれば可いと言つた。金蓮は先頃竊に姦姑の孕藥を手に入れ壬子口を待つてゐたが、けふは恰度其日に當り是非とも西門慶を連れ込まふと思つてじつこ上房

に待つてゐたが西門慶は月娘を憚つて中々立上がらない。そこで再三目交ぜをして簾の口まで喚び出し

『あこで屹度、來て下さいな。こないだ話したあの事を今夜是非やらなければならぬ』

と叫いて立ち去つた。月娘は西門慶を睨と眺め

『まあ何んて圖々しい女でしようね。貴方は今夜決して向ふへ行つてはなりません。かうやつて大勢の女房があつてみれば一視同仁です。貴方は東京から歸つて來て以來、一度も奥へ入つたことはない。可愛さうに孟三姐はけふ一日なんにも食べないで、應二嫂から薦められた二杯の酒を皆戻して仕舞ひました。屹度今苦しがつてゐるでしょう。部屋に行つて見てやつて下さい』

『おゝそうか、俺れは些つとも知らなかつた』

と西門慶は今更驚いて三房に來てみるに、孟玉樓は髪飾りを皆卸して肌着のまゝ炕の上に倒れ、

グーグーと唾を吐いてゐる。

『さうした氣持が悪いか』

「ご腹をさすり背を撫でると、孟玉樓は少し手荒く拂ひ除け  
私しに構つて下さるな。貴方はなぜ向ふへ行かないのです」  
といふ。

「俺れは少しも知らなかつた。今上房で聞いて驚いて來たのさ」

「ふゝそつで御座いましょう。貴方の心の内の人他にあります。私しごもは貴方の女房ではな  
い」

といふ。西門慶は白粉にまみれた彼女の顔を棒け上げて口吻けした。

「お前は何か勘違ひをしてゐるのだよ。おい蘭香、お茶を持つて來て奥さんに上げて呉れ」

蘭香は間もなく茶を持つて來た。西門慶は手つから一碗を取つて孟玉樓の口邊に差しつけた。

「私しは自分で飲みます」

と玉樓はわざと他の一碗を取り

「けふに限つて何も開んなに空々しい事をするにも當りますまい。月娘に言はれたからとて急に

心を改めなくとも好う御座いますよ」

西門慶は慌てゝ

「俺れは此頃仕事が多くて屈托があるから察して呉れ」

と孟玉樓のかほる顚を抱へて管めた。

「およしなさいよ。一杯機嫌で人をおもちやにして」

「いやけふは未だ飯も食つてゐない。これから一處に食はふか」

「私しはお腹が痛くつて連ても戴けません。貴方、欲しければ女中を取りにおやんなさい」

「お前が食べなければ俺れも食べない。何しろ今夜早く寐て、あした任醫官に見て貰らふが可い」

「任醫官が何んです。李醫官が何んです。私しのような者は劉婆子の藥で澤山です」

「開んなら俺れが今夜一晚お前の胸でもさすつてやらう。おゝそつだ。きのふ劉學官から貰つた  
藥がある。極く上等の廣東牛黄だが、あれを熱酒で飲むが可い」

と蘭香に命じて上房から取り寄せた。孟玉樓は一杯飲み了つた時、西門慶も亦それを飲まふと

する。玉樓はチロリと見て

『貴方、それを飲むなら外の部屋に行つて休んで下さい』

『おゝそうか、ではよそう』

こ其儘床の中に入つて玉樓を抱へ、腹だの胸だのさすつてやる。

『さうだね、お腹の具合は』

『えゝ痛みは止まりましたが、まだ胸の中がゴタ／＼してゐます』

『そうか、もう少し我慢しな。ヂキなほる』

玉樓は其夜スツカリ機嫌をなほし胸の悶えを卸したが、一方金蓮は孕薬利用の時期を失つたのが業腹で溜らず、翌朝早く潘姥姥を歸へした。潘姥姥は玉樓の誕生祝に來たのに一往の挨拶もなく歸るこは不都合だ。月娘は怒つた。折も折金蓮は玉簫から内報を得てうべの仔細を聞き、矢も盾も堪らず上房に逆襲し月娘の前で散々嫌味を並べた。そこには吳大妗子、李嬌兒、孟玉樓の外に三人の尼もゐるので、月娘の憤りは絶頂に達し、金蓮の缺點を洗ひ浚ひ指摘して辱しめた。

金蓮も負けてゐず

『お前の旦那が、あの時は非來て呉れこいふ懇望だから、妾は此處に來たのだ。餘計な事はないで、悪るければ悪いでサツサ去り狀出すが可い』

こか、又

『お前さんは私しの事を正式でないこ言ひだが、それはお前丈けの量見で、外から見れば大房も二房も三房も皆同等の位置で少しも差別はない』

こか、又

『お前さんは私しが間男を拵へたとお言ひだが、家の中を看視してゐるお前さんが先き立ちになつてやれば兎も角、それでなければ誰れも出來よう筈がない』

こか、捨鉢になつてあらゆる無禮な事を喋舌り立てた。玉樓は見兼ねて仲に入り、髪振り亂して哭きわめく金蓮を無理に部屋から引出した。そうして玉簫と共に前邊に送りつけた。月娘はその跡見やつて尼達に對ひ

「師父、好いお笑ひ草で、まことにお耻しう御座います」  
『いえ、これは何處でも有勝ちの事で御座います。例言ば灶の中から煙の出ない家は御座いませ  
ん』

ご程好く受け應へて辭し去つた。身重の月娘は餘りに亢奮したので、何だが氣分が變になり、  
其まゝ炕上カンヤに横たわつて吳妗子の介抱を受けた。

六七

東京歸來西門慶の交際は一層廣くなり、毎日招待やら赴席やらで目の廻るように急がしかつた  
が、其間にも彼の好色心は益々増長し、内では金蓮、如意兒を専寵し、外では鄭愛月兒、林太太  
なごを訪ひ、又新に賁四の妻を手なづけた。賁四の妻は元某家の乳母出身で鄭愛香兒に似た細眼  
の愛嬌のある顔立ちだが、過日一女を周守備家に遣はしてから玳安、平安なごに買物なご頼む中  
いつしか彼等と通じた。西門慶は薄々それを承知してゐたので真向から玳安に申し付け二重の横  
取りをした。斯くてその年も暮れ、西門慶三十三歳の春を迎へた。彼の好色心は目を逐ふて盛ん  
になつた。新任何千戸の妻藍氏は、藍太監の姪女で年僅に十八歳、絶世の美人といふ噂がある。  
又王三官の妻黄氏は、これも年若の十九歳で、三官兒の放蕩から常に閨淋しく暮してゐるといふ  
ので、こふから機會を覘つてゐた。そこで一月十二日の燈節を利用し、月娘の名義で同僚、親戚

の妻女を案内した中に、何千戸娘子ニヤンツ、林太太タイク、王三官娘子ニヤンツなごを加へて頻りに出席を慫慂した。林太太は嫁の黄氏に同行を勧め、が果さず、少し遅れて自分一人で来た。又何千戸は西門慶にそんな野心があらうとは知らず、喜んで招待に應じ妻藍氏を遣はした。藍氏は噂に違はず、玉を琢いたような美人で其細つそりした腰付は何んとも言はれない。一目かいまみた西門慶は驚嘆し、『いづれ彼奴も俺れの物だ』

こにやりこした時、後しるに足音がするので振り返つて見るこ會元である。會元は舊臘雇入れた來爵の妻で、台所の手傳ひをさせてゐたものである。藍氏を見た西門慶は狂氣の如く燃ゆつてこれも當座の間に合はせと會元を引つ抱へた。會元は未だ十代のうら若い女であるが、前の主人王皇親家でも恚んな事があつたので、物わかりが早く、何のわけなく磨き従つた。こんな悪戯して、捲棚に來た時、吳大舅、應伯爵、謝希大、常時節は酒を飲んで待つてゐた

應伯爵は彼に對つてあしたの花大舅誕宴に出席するか否かを訊ね、若し出席するならば此處まで邀へに來るこ言つた。

『まあ大底ゆく積りだが、明日になつてみなければわからない。君は一足先きに向ふへ行つてゐたまへ』

こ西門慶はいつになく生返辭をしたが、李銘が來て歌を唱つた時、椅子に凭れて假睡し初めた吳大舅は此様子を見て

『連日の宴會で定めしお勞れでしたらう。けふはこれで散會しましょう』

こ立ち掛けた。西門慶は慌てゝ引き留め、更に二更頃まで飲み續けて漸く散じた。その時月娘は女客を送り出し、ほつこ一息した處へ西門慶が來たのでけふの看燈の事を語り、林太太、荆大人娘子が殊の外喜んだ事、又何千戸娘子は金蓮ニヤンツが合ひ二人手を引連れて花園を散歩したこニヤンツなご語り、其夜は上房に西門慶を引留めた。眞夜中頃月娘はいやな夢を見た。それは晝間林太太が着てゐた大紅絨袍ニヤンツ寸分違はぬ物を、西門慶は李瓶兒の箱から出して月娘に渡した。するこ金蓮は忽ちそれを横合ひから引つ手繰り遠慮なく彼れ自身着用した。お前は此間も毛皮の着物を一枚胡麻化したのに、けふも亦それを奪るのかニヤンツ怒鳴つた時、夢覺めた。明け方此話を聞いた西門



慶は

『よし／＼俺れはあしたお前に一枚拵へてやらう。ふだん心に思つてゐる事は夢に見るものだ』  
と言ひ慰めた。その朝西門慶は何もなく勝れなかつたが、出勤時刻が近づくので我慢して起き上り、前邊の書房に入つて髪を梳かせた。玉簫は如意兒の搾り出した人乳を薬を持って來たので彼は例の通りそれを飲んだが更に元氣がなく、椅子に横たわつて王經に命じ腿を叩かせた。  
『お前、一寸これを來爵の女房にやつて來て呉れ』

こ彼は懷中から一對の金鑲頭簪と四個の烏銀指環を出して玉簫に渡した。又例の癖が初まつたのだな、こ玉簫はニコリして頷き、出て行つたが間もなく歸つて來て

『大層喜んでをりましたよ。いづれお目に掛つてお禮を申上げます、こそう申しました』

こ玉簫は乳の空甌を手に取りクス／＼笑つて立去つた。其あとで王經はあたりを見廻し、王六兒から頼まれた一物を西門慶に渡し

『姉がけふ旦那のおいでを待つてをります』

こ囁いた。王六兒は近頃西門慶がバツタリ足を止めたので氣を揉み出し、緑の黒髪を根元から切り取つて五色のすが糸で巻き、又同心結托兒といふ閨房用の品物を錦帶で括り、又二つの鴛鴦巾着の中に瓜子を詰め、これを一枚の紙に包んで贈り届けたのである。西門慶は喜んで切髪を撫してゐるが、やがて巾着は書厨の中に藏め、錦托兒は袖中に入れてじつ／＼何か考へてゐた。

一方月娘は小玉に粥を煮させ暫く待つてゐるが、一向戻つて來る様子もないので不審に思ひ、自身書房に來て見ると、王經は地に跪いて彼の腿を叩いてゐる。

『おや貴方はさうかなすつたの。少しも元氣がないぢやありませんか。お粥はもうとふに出來てゐますよ』

『何んだか少し具合が悪くて、腿が痛んで困る』

『氣候の變り目だから氣を付けないといけませんよ。屹度春氣に當てられたのでしよう。兎に角一度奥へおいでなさい。薬を飲んだり、お粥を食べたりしたら、いくらか氣が紛れるでしよう』  
こ無理に起して上房に連れて來た。

『大節期でいろく、用事が重なつてゐるからしつかりして下さいよ。それにけふは花大舅の誕生ぢやありませんか、行つてやらないと悪いでしょう。應二哥を喚びましょうか』

近頃大分呼吸を飲み込んで来た月娘は、うまいこ取りなしたが、けふはいつもの西門慶と大分様子が違つてゐた。

『應二哥は一人で行く筈だから構はず置け。俺はけふ向ふへのくのを止めて、獅子街の店で呉二舅と一處に燈籠見物でもして氣晴らしをしよう。あこで何かうまい物を寄越して呉れ』

こ語り、尙ほ暫く愚圖愚圖してゐたが、やがて玳安、王經に供させ、馬に騎つて出た。

獅子街の店は商賣繁昌し、呉二舅と賁四はテンテコ舞をしてゐたが、西門慶の顔を見るこ二人は愛憎好く聲を掛け、來昭の妻一丈青は早速書房を整理し籠下に火を點じ茶の用意をした。間もなく琴童來安は月娘の仰せを受けて點心、暖飯、菜蔬を詰めた二つの方盒と南方土産の豆酒一罇を運んで来た。そこで呉二舅と賁四は交代に書房に伺候し、樓下の燈市を觀てゐる中、晝時となつた。西門慶は王經に吩咐け、自分が此處に來てゐる事を王六兒に知らせ、持參の豆酒を轉送し

た。又一卓の酒菜を備へて、二舅、賁四を慰勞し、今夜は店に泊つて呉れと頼んだ。

王六兒は嬉しい報らせに氣もそわくと春臺を設け酒肴の用意し、又明間に蠟燭を點じウンこめかし込んで待つてゐると、間もなく西門慶が來たので、宛ら初めて逢つた貴人を迎へるよう慌て、四叩頭した。

『先程は結構なものをありがさうよ。此間から再三お前を喚んだが、なぜ來なかつたの』

こ西門慶は先づ口を開いた。

『御覽の通りの暇人で別にこれこいふ用事も御座いませんが、近頃何となく氣に掛ることが御座いますてついで伺ひそびれました』

『無理もない、亭主が旅をしてゐれば』

『誰れがあんな奴を氣に掛けるものですか。それはそうと旦那は此頃好い人が出來たのでこちらは全く御不用物で、ガツカリして仕舞ひました』

西門慶は笑つて

『馬鹿を言ふな。近頃俺れの急がしさと來たら目の廻るようだ。嘘だと思ふなら誰れにでも聞いてみな』

『きのふはどういふ顔振れでした』

『きのふか、ゑゑと皆歴々の奥方ばかりだ。内の奴が二度ばかり喚ばれたから、きのふ一席にまとめて返禮したわけさ』

『看燈は大事なことです。私しどもをなぜ喚んで下さらないの』

『よし、喚んでやらう、十五日は約束があつていけないが十六日は幸ひ一日空きがあるから番頭手代の家内を皆喚ばう』

『喚んで下さつても可いが、此間のようにショードー小大姐女中の敬語から怒鳴られたら引合ひませぬ申二姐は泣く泣く私しとこに來ましたよ。ショードー小大姐はなぜあんなに亂暴なんでしょう。丸で狗を打つて主人の顔を眺めるようなものです。幸ひあこで且那と奥さんのお心附けがあつたから好いようなものゝ、それでなければいつまで私しは泣き付かれたか知れやしません』

西門慶は笑つて

『あいつの腹立坊と來たら今に初まつたことではない。だが根は正直もんで申二姐の妙音に好く惚れ込んだものだらう。好加減に哄して唱つてやれば好かつたのさ』

『いゝそれなら好う御座いますがね。イキナリ上房に跳び込んで來て野犬のようにガミ／＼食つてかゝつたそうです。まあ本當にこわい人ですね』

その時馮嬌嬌が顔を出したが、以前のような馴れ／＼しさはなく唯丁寧に叩頭した。西門慶は銀三四匁ほぎ與へて

『奥さんが亡くなつてからお前も嘸ぞ淋しからう。近頃ちつとも顔を見せないが今何をしてゐる』と聞く。王六兒は代つて答へ

『主人が亡くなれば誰れでも張合ひのないものです。幸ひ私しの處が手不足で此頃何やら手傳つて貰つてゐます』

王經は豆酒を開き、暫らく相手をしてゐるが、やがて席を脱した。王六兒は二三杯の酒に目の

ふちを赤くし

『先程御覽に入れた品物はお氣に召しましたか。あれは私しの腦天の毛ですよ』

『ウムお前の心意氣を有難く受ける』

西門慶は杯を取つて一口飲み干した。

『それからあの錦帶兒はさう思召す』

西王六兒はアクミひ笑みを見せた。曾て金蓮は白綾帯を作つて媚を呈したが、王六兒の錦帶兒も同工異曲である。西門慶は我を忘れて深入りし三更頃に至つて漸く起上つた。別れる時西門慶は一冊の書附けを出し

『あした甘夥計の店へ行つて好きな着物を一襲、撰り出すが良い。模様や色合はお前の隨意だ』  
と言つて渡した。王六兒は再三禮を述べて門口まで送り出し、王經は灯燈提けて前導し、玳安琴童は馬の左右に付き添うて進んだ。折柄雲は重なり合ひ、月は暗く街を照して人の行き來も稀れに閭巷の内では犬が盛んに吠ゑてゐる。こある石橋の前に來た時忽ち一陣の旋風巻き起つて

橋底から怪しの黑影あらはれ西門慶に撞き當つた、こ見るこ馬は驚いて跳ね上り、飛ぶが如く街道を狂奔して門前に至りピタリと止まつた。

金蓮は炕上に假睡してゐるたが西門慶の足音を聞くこすぐ起き上つて邀入れ、いつもの通り着物を脱がせようとしたが、西門慶は泥の如く酔拂つて肩に凭れ

『お前のごとさんはな。けふは筥棒に酔拂つた。逆も一人ぢや歩けない』

と呂律も廻らずへたれ込んだ。金蓮は馴れたもので程好く炕上に押しこかし、手早く着物を脱がせ、帽子や鞋を取つて枕をあてがつた。すると西門慶は忽ち雷のような鼾を上げて押せごも引けごも目が醒めない。そうして身體は棉のように軟かい。金蓮は例のあらゆる手段を盡くして漸くの事で半眼を見開かせ

『あの和尚の薬は何處にありますの』

『馬鹿、そんなものを用ゐて何にする。とよさんはけふは全く駄目だ。饒して呉れ』

『だがあれを飲めば氣持がしつかりして來ますよ』

『お前はそんなに飲ませたいか。飲んで醒めればお前の仕合せだ。薬は盒の中にある。盒は套しの中にある。捜せ』

金蓮はあちこち摸つて上着の套しの中から一盒を發見し、開けて見ると僅に三四粒の丸薬が残つてゐたので、早速自分も一粒呑み、残つた丸薬を西門慶の口に皆開け、焼酒を以て流し込んだ。金蓮はけふ西門慶の身體が萎んでゐるのを見て、いつもより少し餘計用ゐなければ利き目がないと思つた。そうして一粒以上呑んではならぬといふ和尚の戒を知らなかつた。況して前後不覺の西門慶は知るわけもなく注がれるまゝにガブ／＼飲んだ。

其夜金蓮の貪慾は絶頂に達した。五更までに五枚のハンケチ。水銀。血。

酔ひから醒めた西門慶は昏倒した。金蓮は慌て、<sup>ホンゾー</sup>紅棗を食はせたが、そんなさゝやかなもので利き目があるわけはなく、頭は森々として痛み出し身體は重く冷たく感じた。

だが意識はしつかりしてゐたので翌朝いつもの通り起き上り、髪を梳かせようとして椅子に近かついた時、忽ち眼の前が昏くなつて倒れた。春梅は驚いて扶け起し、椅子に昇き上げてみるこ

額は傷付いてゐた。金蓮は青くなり

『どうしたのです。全く身體に力がない。そうやつてじつと落着いてゐる方が好う御座んす。少しお粥でも食べてみたら力が付くでしょう』

こ秋菊を取りにやる。秋菊は台所へ行つて雪娥に此話をしたので、聞き傳へた月娘は喫驚りし。急ぎ金蓮の部屋に来て見るに、西門慶は盆槍して椅子の上に腰掛けてゐる。

『貴方は眩暈がしたそうですね。どうしたのです』

『ウン何んだか知らないが氣持ちが悪い』

金蓮は側から

『私しこ春梅が側に附いてゐたから好かつたのですよ。それでなければ随分危ぶなかつた』  
こ辯疏けらしい事をいふ。月娘は見向きもせず西門慶に對ひ

『貴方はゆゑ歸つて來てから随分又酒をあがつたのでしよう』

金蓮は受け應へて

『きのふは何處で召し上つたか知れないが、可成りお歸りが遅う御座いましたよ』  
月娘はこれに對し

『きのふは獅子街の店で二舅と一處です』

こいつてゐる時、雪娥が粥を持つて來たので、春梅は側に付き添ひ、匙を持つて食はせたが、半碗にも至らぬ中、西門慶は倦怠くなつて首を振つた。月娘は氣が氣でなく

『貴方は一體どんな氣持がするのです』

こ訊いてみた。西門慶は元氣なく

『そうさなあ、身體がいやにふらくして倦怠くてたまらない』

『ではけふ一日衙門を休む方が好う御座います』

『ウム休まふ。だが十五日の周菊軒、荆南崗、何大人招待は重要な件だから陳姐夫のしたぎを一度見て置かふと思ふ』

『けふは未だ藥をあがらないのでしよう』

と月娘は春梅に命じて如意兒の乳を取寄せた。西門慶は一盞飲み了ると、元氣頼みに恢復した態で前邊に出ようとする。角門の前まで來るに急に眼が眩んで危く倒れかゝつたのを春梅に扶けられ已むなく引返へした。月娘は悲しく

『貴方はそんなにヤキモキしないで少しは自分の身體を大事にして下さいよう。人を招待するのにも好いが身體が悪くては仕様がありません。二三日ゆつくり靜養して下さい。そうして何か食べてみたければ私が拵へて上げましょう』

『俺れは今、何も食べたくない』

こ西門慶はグツタリ椅子に凭れてゐる。月娘は金蓮を喚び出し

『旦那はきのふ餘り酔て歸たようにも見ぬないか、お前さんが何か無理強ひしたのぢやないか』  
『あらまあ姐姐チキ、何を被仰るのですよ。旦那はきのふ足を取られるほぎ酔拂つてお歸りになつたが、それでも尙ほ飲み足らず、焼酒が欲しいといふのです。私しはお茶を盞に注いで上げたころそれを飲むとすぐ睡つて仕舞ひました。そういふわけですから私が何をやるものですか。若し

……あれば、屹度外でして來たに違ひありません』

月娘は玉樓と相談して玳安、琴童を訊問したが彼等は唯獅子街より外に出ぬこいふ。そこで吳二舅を喚んで訊いてみるに、西門慶は晝頃まで店にゐるが、それから何處へか出て行つたこいふ。月娘は大怒して詰責したので二人は遂に包み切れず韓道國留守宅で酒を飲んだこを語つた。斯くと聞いた金蓮は獲たりや應こ

『<sup>チーク</sup>姐姐、洗つてみれば慙んなものですよ。ふだん私しは旦那の事で人から怨まれたり憎まれたりしてゐますが、さうです。今になつておわかりでしょう』

と誇りかに言ひ放つて玳安に對ひ

『こないだ何千戸の宴會の時、旦那は大層遅くお歸りだが、年始であんなに暇取るわけはない。序に白狀なさい』

と嚴命した。玳安は勢に懼れて林太太の關係を喋舌つた。月娘は今更呆れて

『まあ、あんな上品な立派な人が、そんな事をするのですかね。人はじつさい見たばかりでは解

からぬものだ。尤もあの年になつて眉を描いたり鬢を畫いたりするのだから、チト變だと思つた  
けれご』

玉樓は嘆息して

『成盡した子供があるのに、少しは恥を知りさうなものがね』

金蓮は唇を返して

『なんで彼奴が恥を知るものですか。有名な淫亂婆ですよ』

月娘はデロリと見て

『お前さんは眞逆か开んな事も言へないでしょう。小さい時には彼處の厄介になつてゐたこいふぢやないか』

と一本極めつけた。金蓮はサツミ顔を赤め

『私しはあの婆の厄介になつた覺は少しもありませんよ。唯小さい時叔母の家が鄰に在つたので、毎日向ふの花園に入り小娘と一處に遊んだこはあります。それでなければあの淫亂面を識

るわけはありません』

『だがお前さんはあの人の前でそんな事が言へますか』

と言はれて流石の金蓮も二の句が繼げない。月娘は雪娥に命じて水餃子スイチョーを作らせ、金蓮の部屋に入つて西門慶を見守つた。李銘以下四名の俳優は十五日の宴會の御用伺ひに來た。平安はこれを取次いで月娘に叱られ四名を逐ひ返へした。西門慶は三つばかり餃子食べるに吐き氣を催し喉へ通らない。月娘は此體を見て

『宴會は二三日見合はせた方が好う御座います。食べる物が食べられないで人を招待しても仕様がありません』

と諫めた。西門慶は黙つて領いた。次の日も相變らず身體がふらくして陰囊は茄子大に腫脹し小便を催す毎に赤い血膿が流れ出し、尿道は刀を以て割くように一遍は一遍と溜らなく痛い。外には護衛や供の者が待つてゐるが、逆も衙門に出てゆく氣力はない。己むなく何大人に手紙をやつて二三日缺勤する由を申入れ、又月娘の勧めに依つて任醫官の來診を請うた。任醫官の診斷

では

『此症は虛火上に炎る腎水下に竭き、既濟する能はず、此れ乃ち脫陽の症なり。要は其陰虛を補ふにあり』

といふわけで藥を送つて來たが、其藥を服むに眩暈が止んた丈けで身體が一層軟くなり、床から下りて來る事も出來ず、陰囊は益々腫脹して放尿困難なつた。應伯爵、謝希大、常時節は次きぐくに見舞に來て、餘り食べたくもないお粥のお招拌なごして病人を慰めた。又李桂姐、吳銀兒なども來たが、これは病人よりも奥向きに取り入ることに熱心だつた。

胡太醫は前の李瓶兒の時失敗した醫者で西門慶は喚ぶ氣もなかつたが、應伯爵の勧めに依り月娘も承諾したので己むなく來診を請うた。その診察に據るに、下部に毒が溜つてゐる。このまゝにして置くと溺血の疾ひとなる。便をこらへて房事を行つたのが原因であるを述べた。月娘は其藥を西門慶に薦めてみると、忽ち石が大海に沈んだような状態なつて小便は全く止つた。そこで驚いて何老人を喚び其診察に據るに、便毒が隆閉して一團の膀胱邪火が下邊に來り、四肢の脈



管に廻り、又濕痰が流聚したので心腎交せざる象ちであると述べた。其藥を飲むと△物が忽ち△起して鉄杵の如く晝夜倒れざる有様となつた。これは誰も知らず唯金蓮丈け知つてゐて竊に殺したり活したりした。次の日何千戸が見舞に來て山西汾州人劉橘齊といふ梅毒專效醫を紹介し、先づ藥を外部に塗附し且つ煎藥を飲ませたが、更に利き目がなかつた。入り交がひに鄭愛月兒は雛鴿の煮浸しと菓子など持つて見舞に來た。愛月兒は自ら炕上に坐して粥を薦め、持參の雛鴿を搯つて西門慶をはぐめめたが、彼は半盞を啜り終らぬ中、首を振つて歇めた。

『一には藥、二には手當てといひますが、食べ物が大事です』

と愛月兒は月娘を見た。玉簫は側で

『それでもいつもより餘計あがつた方ですよ』

と言ひ慰めた。晩になつて劉橘齊の二回目の煎劑を飲ませたが、夜一夜身體が痛んで寐られず五更頃遂に陰囊の腫物が破裂し、又新に龜頭に疔瘡を生じ、蒲團の上に一溜りの血と黄水の池が出来た。月娘は狼狽へて劉婆子を喚んで跳神を行ひ、吳神仙を喚んで易を立てたが易斷の結果は

望み少いものであつた。そこで又中庭に卓を設け、泰安州頂上娘娘に願を立て、進香、掛袍。三年を約した。(進香は祭日に參詣して香を献すること、掛袍は偶像の衣裳を新調すること)

西門慶は身體が益々怠儀になつて眼の前には花子虛、武大の亡靈が現はれ、執念く負ひ目を求めるが、これは人に言ふべきことでないから黙つてゐる。

『あゝ俺れも愈々駄目だなあ』

と嘆息した時、金蓮が來た。そこで急に悲しくなりあたりに人無き幸ひ、金蓮の手を取つて

『お前達は俺れの亡き跡に決して離散してはならないぞ。俺の靈を好く守つて呉れ』

と滿眼に涙を泛べた。金蓮も悲しく

『私しは決して何處へも行きたくありませんが、人から排斥されそうでそれが何より心細う御座います』

と啜り上げた。

『それは俺れも知つてゐる。好く吩咐けて置くから心配するな』

と言つた時、月娘が這入つて來た。見ると二人は眼を赤くしてゐる。

『何かお話があるなら私しも伺ひたいものですが。夫婦になつてから短い月日でもありません』

と月娘は怨じた。爰に至て西門慶は悲しさ包み切れず、しばし聲も上げ得ず哽び泣きしたが、やがて氣を取りなほし漸くの事で口を開いた。

『俺れはもう迎も助かる見込はない。で二つの遺言をして置くが、俺れの亡き跡、お前が一男半女を生んだらば、姉妹でそれを守り育て、人の笑ひを引かぬように一處に仲好く暮して呉れ。又金蓮このいきさつは水に流してこれから未長く可愛がつてやつて呉れ』

斯くと聞いた月娘は覺ゆる涙を流し聲を上げて哭きつゞけた。西門慶は又陳敬濟を喚んで遺言した。

『兒あれば兒に靠る、兒無き者は婿に靠る。お前は我が子も同様だから死後、我が墓穴に土を掛けて呉れ。そうして目上に好くつかへて我が西門家を輝かして呉れ。決して人に笑はれるような事をして呉れるな』

と言ひ終つた後ち、現在の財産状態を語つた。

緞子店資本額五萬兩。これは一部、喬大戸の投資があるから傳夥計の一處に帳合ひして、賣上高の内から元利を返へす事。賁四の絨線舗は本銀六千五百兩。吳二舅の紡絨舗は本銀五千兩。又崔本は過日歸つて來たが韓夥計、來保の松江船は未だ到着せぬ。これは價格四千兩の品物を仕入れて來る筈である。右は凡べて捨賣りして早く元銀を回收する事。

質店の資本は二萬兩。藥店は五千兩。これは従前の如く傳夥計を支配人として長く經營する事。其他の店は一切閉鎖する事。

李三黃四に對する貸金殘高は本金五百兩。利子百五十兩で、これは應伯爵を介して急速に回收する事。外に劉學官に二百兩。華主簿に五十兩の貸金がある。又門外徐四店には元利三百四十兩の取立未納がある。又本宅前の店と獅子街の店は早晚賣り拂つて財産を一處に集め、手確く商賣するここを教へた。陳敬濟は涙を流して引受けた。

それから二日ばかりの間、西門慶は沈々として横たわり折々嗟嘆するのみであつたが、正月二

十一日五更に至つて遂に逝去した。處が未だ棺材の用意をしてゐないので月娘は慌て出し、急ぎ吳二舅と賁四を喚び寄せ、四錠の元寶を渡して適當の物を見めさせた。

孟玉樓、李嬌兒、金蓮、雪娥などが、死者に唐冠を戴かせ、着物を取換へる事で大騒ぎしてゐる時、忽ち小玉は馳けつけ

『奥さんが今、床の上に倒れて息の根を留めて仕舞ひました』

と饒山な報らせをする。そこで玉樓と李嬌兒は上房に来て見るに月娘は酷く腹が痛む體で呻吟してゐる。

『どうしたのです。氣分が悪う御座いますか』

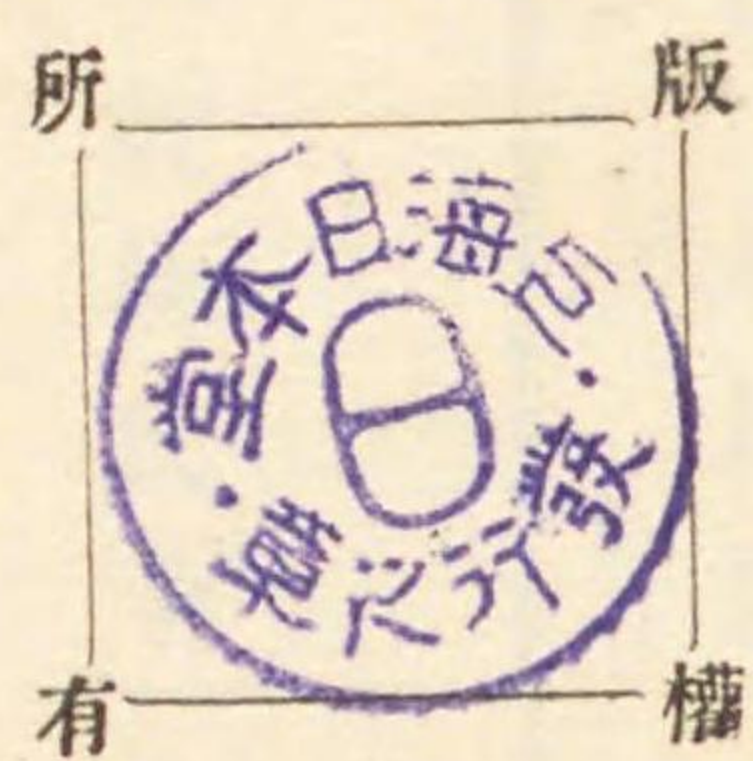
と聞く。月娘に微かに應へて

『旦那が死んだと聞くに急に目がぐらくして來ました。これは大變と床に上る間もなく率倒しました。今氣が付いてみるにお腹が酷く痛いのです。早く蔡老娘を喚んで下さい。それから草紙を持つて來て下さい』

と頼んだ。李嬌兒は月娘の昏倒したのを知つてゐたが、其時女中は狼狽し、又棺材の銀を出したばかりの處で箱の蓋は開け放しになつてゐるのを幸に、竊に五錠の銀をセシメ何食はぬ顔して五房に入り屍體の始末を手傳つてゐるに小玉が知らせて來たので、俄に忠勤を勵んで前方に行つて小廝に吩咐け又乳母の如意兒なごを連れて來た。孟玉樓はやゝしばらく草紙を搜してゐたが一向様子がわからないのでわざゝ自分の部屋に戻つて草紙を持つて來た。その時早くも蔡老娘は馳け付け、一家を擧げて號泣する間に月娘は安々と男の子を産んだ。

(おわり)

大正十二年十月十日印刷  
大正十二年十月十五日發行  
大正十二年十二月一日再版發行



發行所

著者

井上

進

發行者

杉江

房造

印刷者

蘆澤

民治

印刷所

蘆澤

印刷所

上海文路

日本堂書店

電話北二〇八三

振替口座福岡二六七〇番

金瓶梅と支那の社會狀態下

定價 銀二弗五十仙

著名刊新行發堂本日海上

<p>池田桃川氏著 讀賣新聞特派員</p>	<p>井上紅梅氏著</p>	<p>山口昇氏著 澁澤子爵題字</p>	<p>東亞同文書院教授 馬場敏太郎先生著</p>
<p>支那香艷叢書</p>	<p>支那風俗</p>	<p>支那に於ける歐米人の文化事業</p>	<p>支那經濟地理誌 交通全編</p>
<p>豫約出版にてレコ 破りの好評を 受け完成せしもの 希望者多き爲め 更に増刷して同 好に頒たんとす此 本に限分賣御斷</p>	<p>特色は支那臭い 云ふ所を充分 につかんで近代 支那の内面生活 語るもの</p>	<p>著者は支那海關 勤務の餘暇佐原 勤務の支那研究 多年支那に於て の文化的交渉米 撤底的に書ける もの</p>	<p>斯學の權威たる 著者が親しく支 那内地を調査研 究せし結果を發 表せる一大寶典 なり</p>
<p>第一冊支那宮廷秘録 第二冊支那性慾小傳 第三冊支那性慾小説 總頁千頁(四六)ニ 全三冊 金八圓參拾錢 送料五十仙</p>	<p>四六(ポイント) 各卷 五百頁 上、中、下、完結 各冊金參圓 送料各十九錢</p>	<p>菊判(クロース) 全一冊金七圓 送料六十五錢</p>	<p>菊判(クロース) 千四百頁 附圖 四十五葉 定價 銀六圓 送料 金七圓 六十五仙</p>

著名刊新行發堂本日海上

地田桃川氏著	池田桃川氏著	澁川玄耳先生序 讀賣新聞 上海特派員 池田桃川著	西本白川先生序 石川順著
上海百話	續上海百話	訂正再版 江南の名勝史蹟	西藏を望みて
日支人の生活相 及及び附近の山水 の経快なる筆致 を以て記述した るもの	上海に於ける日 支人各方面の興 味ある話を集め たもの社会研究 の資料となり外 史の資料も凝 らぬ物語である	史實の紹介と旅 行に必要な一 般的案内を以て しつたれば讀者は 趣味が實益と二 つながら得べし	生死の境を経て 視察任務を果せ し紀行通信にし て前人未だの土 地風俗人情を窺 知すべし
四六版 三百五十三頁 定價 金貳圓 送料 十三錢	四六版 三百六十八頁 定價 金貳圓 送料 十三錢	總數 參百貳十頁 菊版總クローズ 美本携帶便利 定價 金貳圓 送料 金十八錢 (書留)	寸延 二百頁 寫眞版數葉地圖附 定價 金壹圓 送料 十一銀

著名刊新行發堂本日海上

田邊輝雄氏校閱 濱田峯太郎著	東亞同文書院教授 馬場鐵太郎先生著	滬上榷客先生序 江南健兒共著
支那に於ける 紡績業	禹城學會叢書第一編 支那郵便制度 現行料金表添	新上海 附蘇杭南京案内
商務官横竹氏序 して曰く引證該 博論議穩健事 肯綮に中り支那 紡績業の現状及 將來を觀察する 上に於て多大の 好參考書なり云 々	支那古代の郵驛 より清朝時代に 及び最近在支外 國郵便局撤廢後 の現行制度を詳 叙せるもの	徒らに批判感想 等を加へず赤裸 の大上海を紹介 せるもの旅行者 の指針たり
菊判 三百五十頁 脊角クローズ上製 定價 參弗五十仙 送料 十五仙	郵便風俗寫眞 十頁挿入 菊判 二百頁 定價 一弗 送料 十仙	四六 二百三十頁 クローズ 寫眞版 數葉 地圖 四葉 汽車時間表 附 定價 一弗五十仙 送料 十仙

著名刊新行發堂本日海上

<p>王一亭先生口繪 井上紅梅先生著</p>	<p>井上紅梅先生著</p>	<p>大谷是空先生著</p>	<p>大谷是空先生著</p>
<p>金瓶梅 會社支那の 狀況の</p>	<p>土匪研究 徒</p>	<p>萬年筆</p>	<p>滑稽 しくじり譚叢</p>
<p>淫書の筆頭と目 さる、本書も譯 著の麗筆により 上品に其眞味を 失わず藝術書を して公刊せる珍 書</p>	<p>泥棒横行の國支 那のあらゆる種 類の悪徒土匪の 内幕を研究説明 せるもの</p>	<p>あらゆる階級の 女を縦横にこき 下せる獨特の皮 肉文</p>	<p>支那に於ける若 しくば支那に關 係ある名士のし くじりをスツパ 抜ける坐談の友</p>
<p>四六版 クロース 各三百八十頁 上中下三冊 各定價貳圓五十錢 書留送料 十錢宛</p>	<p>四六版 指紋紙裝釘 三百五十一頁 一冊讀切 定價 貳圓五十錢 書留送料 十錢</p>	<p>四六版 二百二十頁 定價 八十錢 書留送料 十錢</p>	<p>四六版 壹百頁 定價 四十錢 書留送料 十錢</p>





